

「歩きたくなる」事業（徳重・横井・鹿児島線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

竹ノ山A・B遺跡

2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、鹿児島県土木部の「歩きたくなる」事業に伴って平成10年に実施した竹ノ山A・B遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。両遺跡は伊集院町に位置し、毎年行われる妙円寺参りのルートとして賑わいを見せています。さて、今回の発掘調査では竹ノ山B遺跡において旧石器時代の陥し穴が発見されました。この陥し穴は、旧石器時代の狩猟形態を考える上で極めて重要なものと考えられます。

今回の発掘調査で発見された遺構・遺物が、調査研究及び文化財保護の一役を担う事が出来れば幸いです。

最後になりましたが、この発掘調査並びに報告書作成に御協力いただきました関係者に心から感謝いたします。

平成13年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井 上 明 文

報 告 書 抄 録

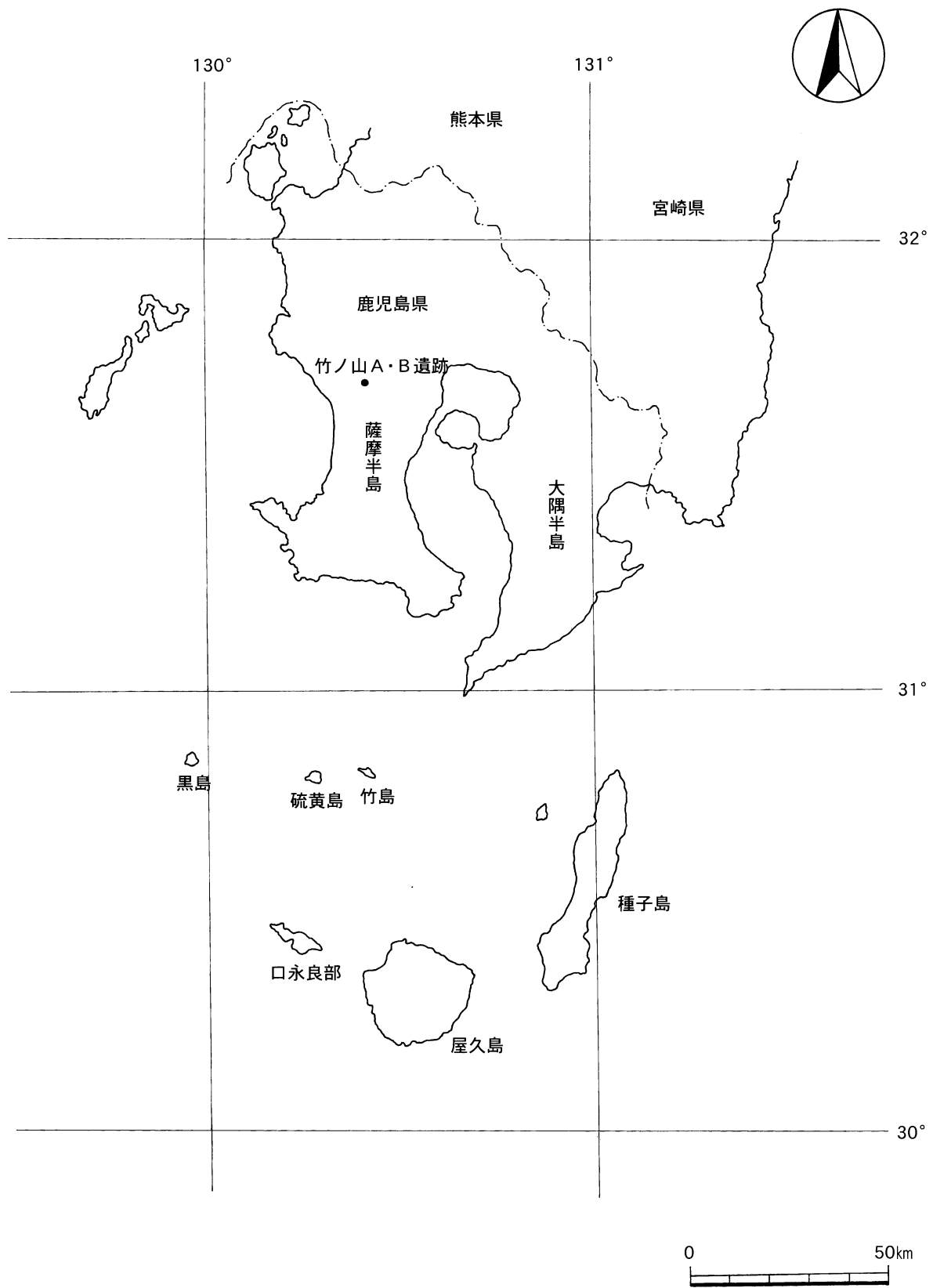
ふりがな	たけのやまいせき							
書名	竹ノ山A・B遺跡							
副書名	「歩きたくなる」事業（徳重・横井・鹿児島線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	29							
編著者名	黒川忠広・桑波田武志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL0995-65-8787							
発行年月日	2001年3月30日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	面積 ㎡	調査原因
所蔵遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たけのやま 竹ノ山A遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 いじゆういんちょうたけのやま 伊集院町竹ノ山	30	84	31° 37′	130° 27′	H10.9.29 ～ H10.10.13	200	「歩きたくなる」事業
たけのやま 竹ノ山B遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 いじゆういんちょうたけのやま 伊集院町竹ノ山	30	85	31° 37′	130° 27′	H10.9.29 ～ H10.10.13	200	「歩きたくなる」事業
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹ノ山A遺跡	散布地	縄文時代早期 前期末 後期 古墳時代	なし	吉田式土器 押型文土器 撚糸文土器 塞ノ神式土器 深浦式系土器 出水式系土器 成川式土器				
竹ノ山B遺跡	散布地	旧石器時代	陥し穴2基	黒曜石剥片				



竹ノ山B遺跡1号陥し穴逆茂木痕



竹ノ山B遺跡2号陥し穴完掘状況



第1図 遺跡位置図

例 言

- 1 本書は、「歩きたくなる」事業（徳重・横井・鹿児島線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査における測量・実測・写真撮影等は調査担当者がおこなった。
- 4 本書掲載の実測図等の浄書は、整理作業員の協力を得て黒川・桑波田がおこなった。
- 5 遺物番号は、本文及び挿図・図版の番号と一致する。
- 6 本書に用いたレベル数値は、全て海拔絶対高である。
- 7 出土遺物の写真撮影及びプリントは、鶴田静彦氏・横手浩二郎氏の協力を得た。
- 8 本書の執筆分担は以下の通りである。
 - 第1章・・・黒川
 - 第2章・・・桑波田
 - 第3章・・・黒川
 - 第4章・・・桑波田
 - 第5章
 - 第1節・・・黒川
 - 第2節・・・桑波田
- 9 本書の編集は黒川・桑波田がおこなった。

目 次

第1章 調査の経過と組織	7
第1節 調査に至るまでの経過	7
第2節 調査の組織	7
第3節 調査の経過	8
第2章 遺跡の位置および環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3節 周辺の遺跡	10
第3章 竹ノ山A遺跡の調査	12
第1節 調査の概要	12
第2節 層序	12
第3節 調査の成果	13
(1) 旧石器時代の調査	13
(2) 縄文時代の調査	13
① 土器	14
② 石器	18
(3) 弥生時代以降の調査	19
① 土器	19
② 石器	20
第4章 竹ノ山B遺跡の調査	22
第1節 調査の概要	22
第2節 層序	23
第3節 調査の成果	23
(1) 遺構	23
(2) 遺物	26
第5章 調査のまとめ	30
第1節 竹ノ山A遺跡のまとめ	30
第2節 竹ノ山B遺跡のまとめ	31

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	周辺の遺跡	11
第3図	竹ノ山A遺跡周辺地形図	12
第4図	竹ノ山A遺跡土層断面図	12
第5図	1～4類土器出土状況図	13
第6図	5・6類土器出土状況図	13
第7図	縄文時代の土器実測図(1)	15
第8図	縄文時代の土器実測図(2)	16
第9図	縄文時代の土器実測図(3)	17
第10図	縄文時代の石器出土状況図	18
第11図	縄文時代の石器実測図(1)	18
第12図	縄文時代の石器実測図(2)	19
第13図	弥生時代以降の土器出土状況図	19
第14図	弥生時代以降の土器実測図	20
第15図	弥生時代以降の石器出土状況図	20
第16図	弥生時代以降の石器実測図	20
第17図	竹ノ山B遺跡周辺地形図	22
第18図	竹ノ山B遺跡土層断面図	23
第19図	VII a層上面コンタ図・トレンチ配置図・1, 2号陥し穴位置図	24
第20図	1号陥し穴実測図	25
第21図	2号陥し穴実測図	27
第22図	VII a～VII c層遺物出土状況図	28
第23図	仁田尾遺跡と竹ノ山B遺跡の陥し穴	32

表 目 次

付 表	報告書抄録	
第1表	周辺の遺跡一覧表	10
第2表	竹ノ山A遺跡出土遺物観察表	21
第3表	竹ノ山B遺跡石器計測表	29
第4表	南九州の陥し穴一覧表	32

図 版 目 次

図版1	竹ノ山B遺跡1号陥し穴逆茂木痕・2号陥し穴完掘状況	
図版2	竹ノ山A遺跡遺物出土状況・土層断面・竹ノ山B遺跡作業風景	33
図版3	竹ノ山B遺跡土層断面・竹ノ山B遺跡完掘状況	34
図版4	1号陥し穴埋土状況・1号陥し穴完掘状況	35
図版5	2号陥し穴埋土状況・2号陥し穴半裁状況	36
図版6	竹ノ山A遺跡出土遺物(1)	37
図版7	竹ノ山A遺跡出土遺物(2)	38
図版8	竹ノ山A遺跡出土遺物(3)	39
図版9	竹ノ山A遺跡出土遺物(4)・整理作業の状況	40

第1章 調査の経過と組織

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県土木部（以下県土木部）は、県道徳重・横井・鹿児島線において「歩きたくなる」事業を計画実施してきた。平成9年度の事業実施中、事業区内において竹ノ山A・Bの2遺跡の存在が判明し、県土木部は、県教育委員会文化財課（以下県文化財課）と県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）と遺跡の取り扱いについて協議をおこなった。

協議の結果、平成9年度に試掘をおこない遺物包含層を確認した上で、平成10年度に全面調査を実施する運びとなった。

この結果を受けて、平成10年度に竹ノ山A・B遺跡の全面調査を実施した。

第2節 調査の組織

① 発掘調査

事業主体者 鹿児島県土木部（道路建設課）

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育委員会文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉 永 和 人
	〃	次長兼総務課長	尾 崎 進
	〃	調 査 課 長	戸 崎 勝 洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新 東 晃 一
	〃	主任文化財主事	青 崎 和 憲
調査担当者	〃	文化財研究員	黒 川 忠 広
	〃	文化財研究員	桑波田 武 志
調査事務担当者	〃	主 査	政 倉 孝 弘
	〃	主 査	前屋敷 裕 徳
	〃	主 査	溜 池 佳 子

発掘調査作業員

伊井美雪 上之エイ子 上原弘美 川路美智子 仮屋郁夫 仮屋アキ 仮屋八重子 河野千鶴子 新福咲子 馬場辰三 馬場園ミツ子 馬場園弘子 備瀬裕子 福田明子 福元リツ前村時夫 前村サチエ 益満郁美 松岡タエ 松山ノリ子 山内ヒロ子 弓場スギ子 弓場ナツ子 弓場ヨシ子 若松政子 脇田敬子

② 報告書作成

事業主体者 鹿児島県土木部（道路建設課）

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育委員会文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井 上 明 文
	〃	次長兼総務課長	黒 木 友 幸
	〃	調 査 課 長	新 東 晃 一
	〃	調 査 課 長 補 佐	立 神 次 郎
	〃	第一調査係長	青 崎 和 憲
	〃	主任文化財主事	中 村 耕 治
調査担当者	〃	文化財研究員	黒 川 忠 広
	〃	文化財研究員	桑波田 武 志
調査事務担当者	〃	総 務 係 長	有 村 貢
	〃	主 事	溜 池 佳 子

整理作業員

岡部安代 川畑裕美子 細田保子 竹ノ内礼子 徳永郁代 前原順子

なお、発掘調査及び報告書作成において次の方々より御指導・御教示をいただいた。

安藤浩 日高広人 中村和美 八木澤一郎

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成10年9月29日から平成10年10月13日までおこない、報告書作成は平成12年度に実施した。

以下、発掘調査の経過は調査日誌を整理し日誌抄で述べることにする。

- 9月29日 道具搬入。A遺跡のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。B遺跡表土剥ぎ。
- 9月30日 A遺跡のⅡ・Ⅲ層掘り下げ・遺物出土状況写真撮影。B遺跡Ⅶa層上面精査。
- 10月1日 A遺跡のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。Ⅱ・Ⅲ層遺物取り上げ。
- 10月2日 A遺跡のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。B遺跡，1号陥し穴状遺構掘り下げ。
- 10月5日 A遺跡のⅥ層掘り下げ。B遺跡，1号陥し穴状遺構掘り下げ。
- 10月6日 A遺跡の下層確認。B遺跡の1・2号陥し穴状遺構掘り下げ。
- 10月7日 A遺跡の遺物取り上げ，土層断面実測。B遺跡の1・2号陥し穴状遺構掘り下げ。
A遺跡調査終了。
- 10月8日 B遺跡のコンター図作成。
- 10月9日 B遺跡の遺物取り上げ。
- 10月12日 B遺跡の1・2号陥し穴状遺構掘り下げ・実測・写真撮影。
- 10月13日 B遺跡の1・2号陥し穴状遺構完掘。土層断面実測。
B遺跡の調査を終了。道具搬出。

第2章 遺跡の位置および環境

第1節 地理的環境

竹ノ山A・B遺跡は、鹿児島県日置郡伊集院町竹之山新村下に位置する。

遺跡の所在する伊集院町は薩摩半島の北部にあり、南薩地方と北薩地方との結节点的位置にある。東は鹿児島市・松元町、西は東市来町・日吉町、南は日吉町・松元町、北は郡山町・東市来町に接し、日置郡の中北部を占める。

伊集院町の地形は、北に重平山、南西の日吉町との町境に矢筈岳（301.4m）、諸正岳（302.9m）等の山岳があり、伊集院町周囲を取り巻く標高約160m前後のシラス台地とそれらの台地を神ノ川及びその支流により開析することによって形成された標高約60mの狭い谷底平野とからなる。伊集院町の行政・商業の中心地は、その狭い平野を中心に展開している。遺跡の南に位置する松元町も、伊集院町と同様台地・平野とから構成され、本遺跡は台地に位置する。このように、行政区分では伊集院町の南東部、松元町の北部の接する台地部分にあたる。

竹ノ山A・B遺跡はそれぞれ標高約160m、170mのシラス台地上に位置し、南を石谷川、北を長松川に開析された西側に伸びる舌状台地の南側斜面に位置する。遺跡の南側を流れる石谷川との比高差は約20mである。

第2節 歴史的環境

竹ノ山A・B遺跡の所在する伊集院町における考古学的調査の歴史は比較的新しい。伊集院町はその町名にもあるとおり、古代に租税の物品を収納し、管理する倉庫（＝院）が置かれたことに町名の由来があり、中世～近世にかけては薩摩藩主島津氏の拠点のひとつとして位置付けられている。そのため伊集院町の歴史も中世以降の文献史学の研究が中心となっている。先史時代の本格的調査は、近年の南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査が初めてであり、それらの成果より伊集院町の歴史が約2万数千年前の旧石器時代まで遡ることが明らかとなっている。近年の調査成果をまとめてみると、伊集院町の歴史を旧石器時代ナイフ形石器文化期まで遡らせた下谷口の永迫平遺跡や、細石器文化期及び縄文時代草創期の遺物が出土した竹之山の瀬戸頭遺跡、日本でも最古級の縄文時代早期初頭の赤色顔料土器が出土した恋ノ原の稲荷原遺跡、大田の上山路山遺跡、縄文時代早期前葉の集落や道跡などを検出した永迫平遺跡、上山路山遺跡などがあり、いずれも伊集院町の歴史の古さを窺わせるものばかりである。

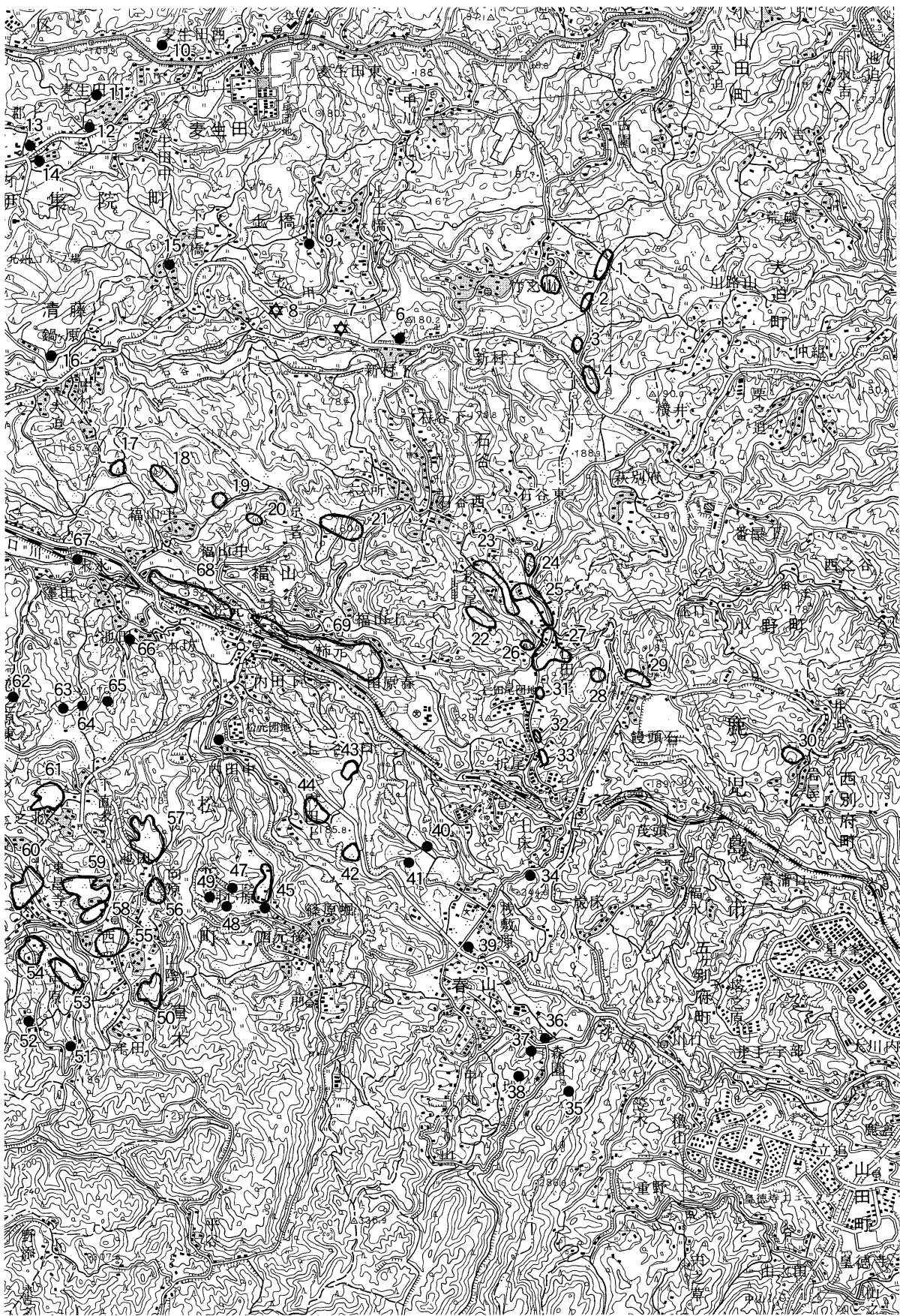
また、遺跡の南に位置する松元町も近年の西回り自動車道建設に伴う発掘調査により、同台地上で旧石器・縄文の遺跡が多数確認されている。本遺跡の南東側で直線距離約3kmに位置する仁田尾遺跡では竹ノ山B遺跡で確認されている旧石器時代の陥し穴が多数検出されている。

本遺跡では縄文時代早期後半の土器や旧石器時代ナイフ形石器文化終末～細石器文化期の陥し穴2基を検出しており、当台地上の先史時代に新たな一面を付け加えることとなった。特にB遺跡で検出された陥し穴は県内でも類例が少なく、該期の狩猟形態を考える上で貴重な資料を提供したといえる。

第3節 周辺の遺跡

竹ノ山遺跡は日置郡松元町と同伊集院町の町境付近に位置する。周辺には旧石器時代から近世の遺跡が多数存在する。各遺跡の時期については下表のとおりである。

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物など	備考
1	瀬戸頭A	伊集院町竹之山	旧石器～縄文	ナイフ・細石器	
2	瀬戸頭B	伊集院町竹之山	旧石器～縄文		
3	瀬戸頭C	伊集院町竹之山	旧石器	台形石器	
4	横井竹ノ山	鹿児島市大迫町	旧石器～縄文	ナイフ・細石器・土器	
5	松ヶ迫	伊集院町竹之山	旧石器～弥生	細石刃核・土器	表面採集
6	長崎城跡	伊集院町竹之山			
7	竹ノ山A	伊集院町竹之山	縄文～古墳	土器	
8	竹ノ山B	伊集院町竹之山	旧石器	陥穴・石器	
9	土橋クイノハイ	伊集院町麦生田		磨製石斧	
10	麦生田城跡	伊集院町麦生田			
11	宮下墓地	伊集院町麦生田	中～近世	五輪塔・相輪	
12	平等寺跡	伊集院町麦生田	中世	五輪塔・無縫塔	伊集院忠国夫婦の墓
13	山ノ脇	伊集院町麦生田	縄文中期～中世	土器・石器・建物跡	平成11～12年度全面調査
14	梅落	伊集院町麦生田	縄文	スクレイパー・集石	平成11年度全面調査
15	下土橋	伊集院町土橋		磨製石斧	
16	鍋倉	伊集院町清藤	縄文	角筒土器片	
17	山下堀頭	松元町福山	縄文～古墳	土器・方形周溝墓	平成6年度全面調査
18	フミカキ	松元町福山	縄文早期～晩期	土器・集石ほか	平成6～7年度全面調査
19	中柿ヶ迫	松元町福山			
20	京旨後平	松元町福山			
21	前原	松元町福山	旧石器～縄文	土器・石器・住居跡ほか	平成3～8年度全面調査
22	前山	松元町石谷	旧石器～古墳	土器・石器・礫群	平成7～8年度全面調査
23	宮ヶ迫	松元町石谷	旧石器	ナイフ形石器・細石器	平成8～10年度全面調査
24	隠迫	松元町石谷	縄文・旧石器	土器・石器	平成12年確認調査
25	榎堀	松元町石谷	旧石器～古墳	細石器・石鏃・土器	平成4～8年度全面調査
26	西ノ原	松元町石谷	旧石器	細石器・ナイフ形石器	平成6年度全面調査
27	仁田尾	松元町石谷	旧石器・縄文	細石器・ナイフ形石器	平成5～9・11年度全面調査
28	宮尾	松元町石谷	縄文・中世	土坑・青磁片	平成8年度全面調査
29	木ヶ暮	鹿児島市西別府町	縄文	土器	昭和27年調査
30	山ノ中	鹿児島市西別府町	縄文後期～中世	土器・石器・住居址	平成7年度全面調査
31	御仮屋跡	松元町石谷			平成8年度分布調査
32	仁田尾中A	松元町石谷			平成8年度分布調査
33	仁田尾中B	松元町石谷	縄文・旧石器	土器・石器・集石	平成12年度全面調査
34	小原迫	松元町春山	縄文早期・前期	押型文・貝殻文土器・石斧	
35	岩屋観音	松元町春山			
36	ジキジン寺跡	松元町春山			
37	森園の田の神	松元町春山			
38	春山城跡	松元町春山	弥生・中世	堀跡・土器	
39	棧敷原	松元町春山	縄文・弥生	土器・石斧	考古学雑誌8-8・11-12
40	大堀原	松元町上谷口	縄文・古墳		平成7年度確認調査
41	耳田原	松元町上谷口	縄文～古墳		平成7年度確認調査
42	立番上	松元町上谷口		土器	平成3年度分布調査
43	北田平	松元町入佐	古墳		平成3年度分布調査
44	詰土原	松元町上谷口	古墳		平成8年度分布調査
45	上坊石塔群	松元町上谷口			
46	内迫平	松元町直木	古墳		平成3年度分布調査
47	別心	松元町上谷口	弥生～古墳	土器片	松元町埋蔵文化財発掘調査報告書(1・2)
48	別心原	松元町別心原	弥生後期	弥生土器・磨製石斧	
49	無崎平A	松元町上谷口	弥生～古墳	土器片	平成1年度分布調査
50	無崎平B	松元町上谷口	弥生～古墳	土器片	平成1年度分布調査
51	馬込原	松元町直木	弥生～古墳	土器片	松元町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
52	小中原	松元町直木		石斧・石鏃	
53	立元	松元町直木	縄文早期	塞ノ神式土器・石鏃	
54	東昌寺宮田岡	松元町直木			
55	山方	松元町直木	弥生後期	弥生土器	
56	西畑	松元町直木	縄文	土器片	平成7年度確認調査
57	東原	松元町直木	縄文	土器片	平成3年度分布調査
58	向原	松元町直木	縄文		平成3年度分布調査
59	東昌寺	松元町直木			
60	西島とどん	松元町直木	弥生後期	弥生土器・磨製石斧	考古学雑誌8-8・11-12
61	西ノ迫	松元町直木	古墳	土器片	平成3年度分布調査
62	稲荷原	伊集院町恋ノ原	縄文早期～晩期	土器片・石斧・石鏃	平成8年度全面調査
63	火ノ宇都	松元町下直木	弥生～古墳		平成2年度分布調査
64	大山	松元町下直木	縄文中期		平成2年度分布調査
65	喜次郎岡	松元町上谷口	古墳～平安	土器片	平成3年度分布調査
66	末永	伊集院町末永八幡横	中・近世	五輪塔・相輪	
67	末永	伊集院町窪田郵便局	中・近世	五輪塔・宝塔	
68	上柵城	松元町上谷口	中世	室町後期	
69	下柵城	松元町福山	中世	室町後期	

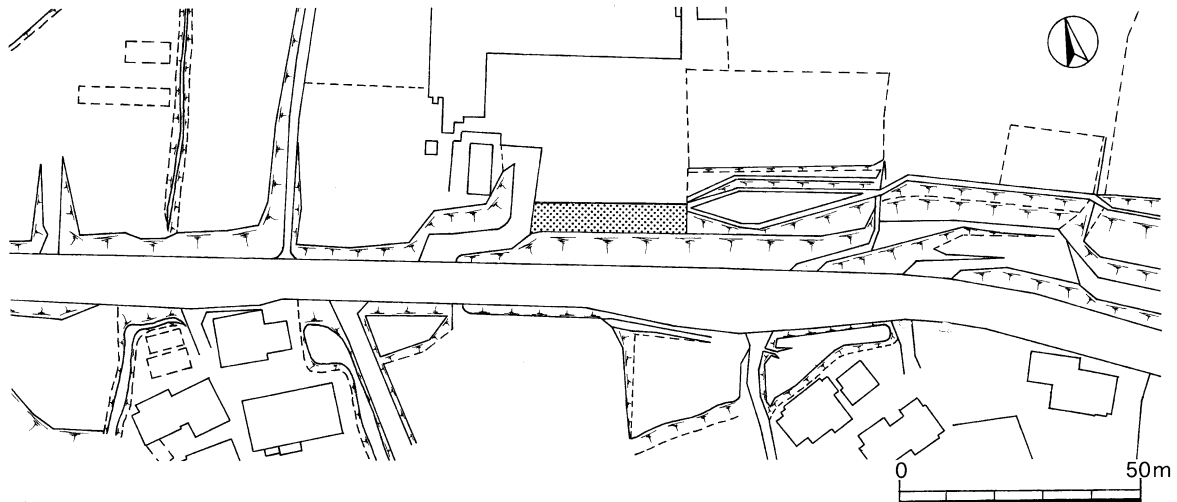


第2図 周辺の遺跡

第3章 竹ノ山A遺跡の調査

第1節 調査の概要

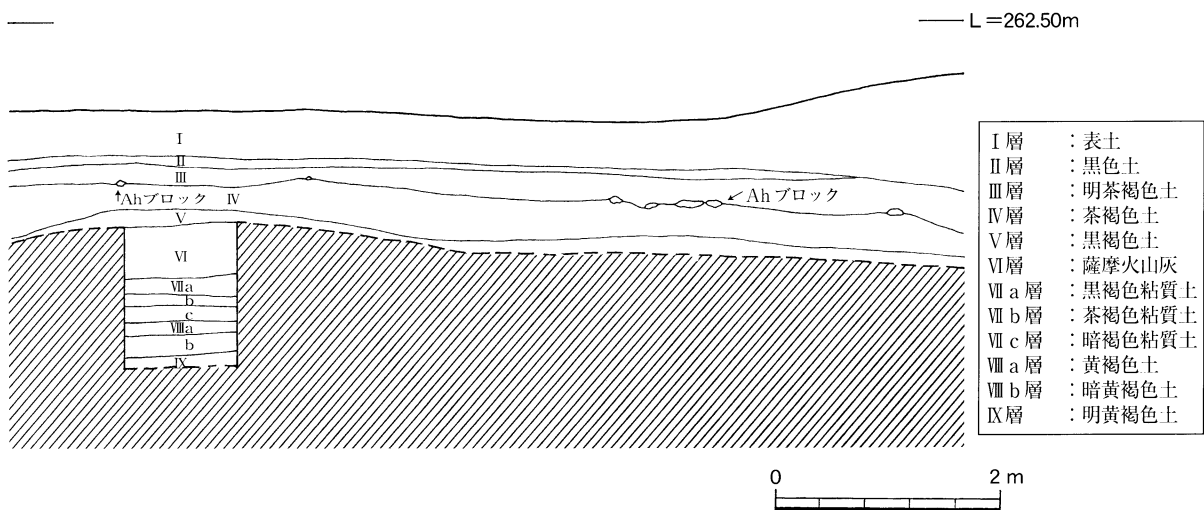
発掘調査は、表土を重機で除去した後にⅥ層上面まで人力による掘り下げをおこなった。Ⅶ層以下は、10mごとに先行トレンチを入れ下層を確認しながら掘り下げていった。その結果、旧石器時代の遺物は黒曜石のチップが1点出土するに留まった。縄文時代早期の遺物は、Ⅲ層からⅣ層にかけて出土し、縄文時代前期末から古墳時代にかけての遺物は、Ⅱ層からⅢ層上面にかけて出土した。



第3図 竹ノ山A遺跡周辺地形図

第2節 層 序

竹ノ山A遺跡の層位は、Ⅱ層が一部攪乱を受けてはいたが、概ね残存している状況であった。アカホヤ火山灰は明瞭な堆積が見られず、縄文時代早期と前期以降とが一部混在している状況が見られ、薩摩火山灰は厚く良好な状態で堆積していた。土層断面は、調査区の北壁を実測し図化した。



第4図 竹ノ山A遺跡土層断面図

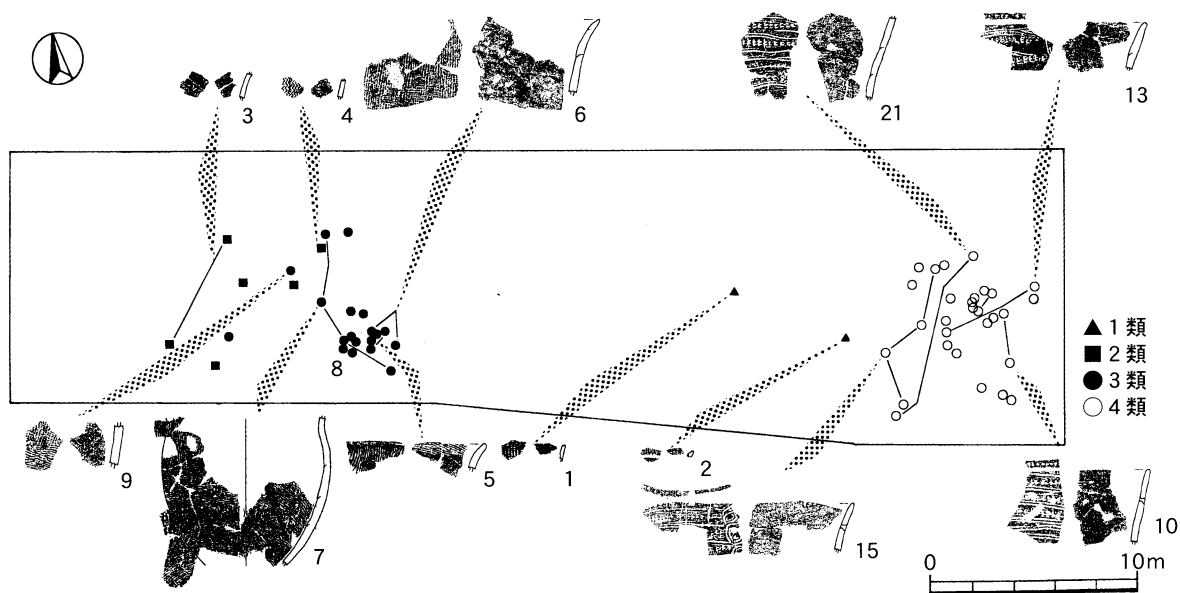
第3節 調査の成果

(1) 旧石器時代の調査

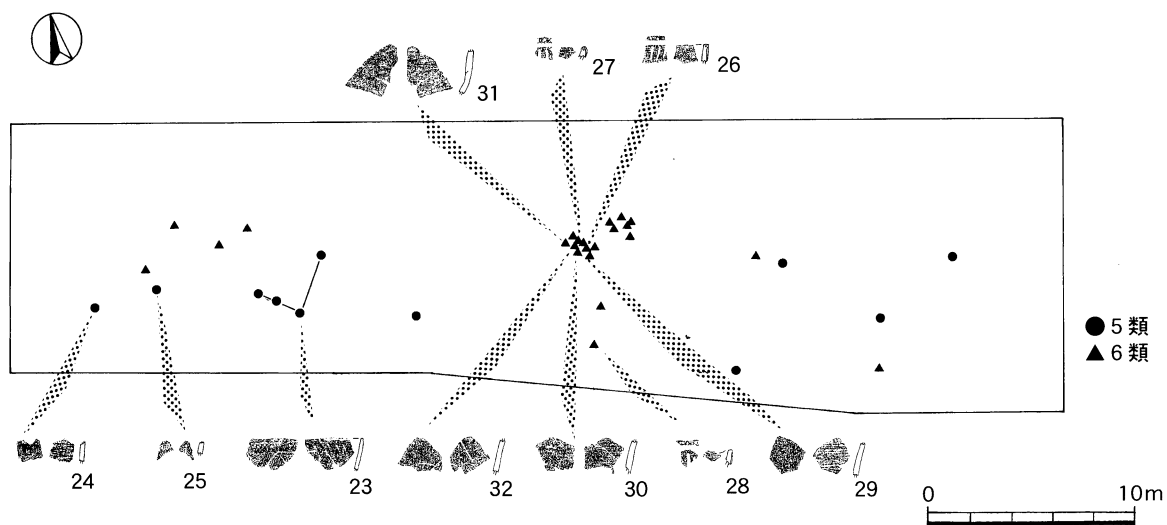
Ⅶ a層中より黒曜石剥片1点が出土するに留まった。

(2) 縄文時代の調査

遺物はⅡ層～Ⅳ層にかけて土器・石器が出土した。しかし、層別に型式が分かれて出土するといった状況は見られなかったため、土器は形態で分類をおこない、石器は下層の遺物から順に実測図を掲載した。



第5図 1～4類土器出土状況図



第6図 5・6類土器出土状況図

① 土 器

第1類 (第7図1・2)

胴部に貝殻押引文を施す土器である。接合作業後、資料数は2点となり2点を図化した。

1は、胴部破片である。貝殻の縁部を器面に当て、断続的に圧力をかけながら横位に施文している。2は底部片で、串状の工具を用いて縦位の細い沈線を施している。厳密に1と同類であるかは断定できない。

第2類 (第7図3・4)

押型文土器を一括した。接合作業後、資料数は5点となり2点を図化した。3は、粒の小さい楕円押型文である。4は、縦位の山形押型文で、いずれも小破片である。

第3類 (第7図5～第8図9)

撚糸文土器である。Ⅱ層からⅣ層にかけて19点が出土し、5点を図化した。これらは、胎土や色調などから同一個体と思われる。器形は、口縁部が外反し胴部が膨らむ。口唇部は丸みを呈する。文様は、口縁部内面に斜位の撚糸文を施す。口縁部は縦位に撚糸文が施されるが、胴部以下は横位である。文様の切り合い関係から、胴部施文の後口縁部を施文したことが窺われる。内面は丁寧なナデである。5は、口縁部が外反し口縁部内面に斜位の撚糸文を口縁部外面に縦位に近い斜位の撚糸文を施す。6は、胴部の横位撚糸文が口縁部の斜位撚糸文に切られている。7は、口縁部が外反し胴部はやや膨らんで底部へ至ると思われる。底部の形状は不明である。文様は、横位に近い撚糸文を器面全体に施すが、胴部上半においては縦位に近い斜位の撚糸文が重なっている。結果、部分的に格子状を呈している。内面は、ナデによる調整が施され約9cmの粘土帯による積み上げで接合部分には指頭圧痕が残る。

第4類 (第8図10～第9図22)

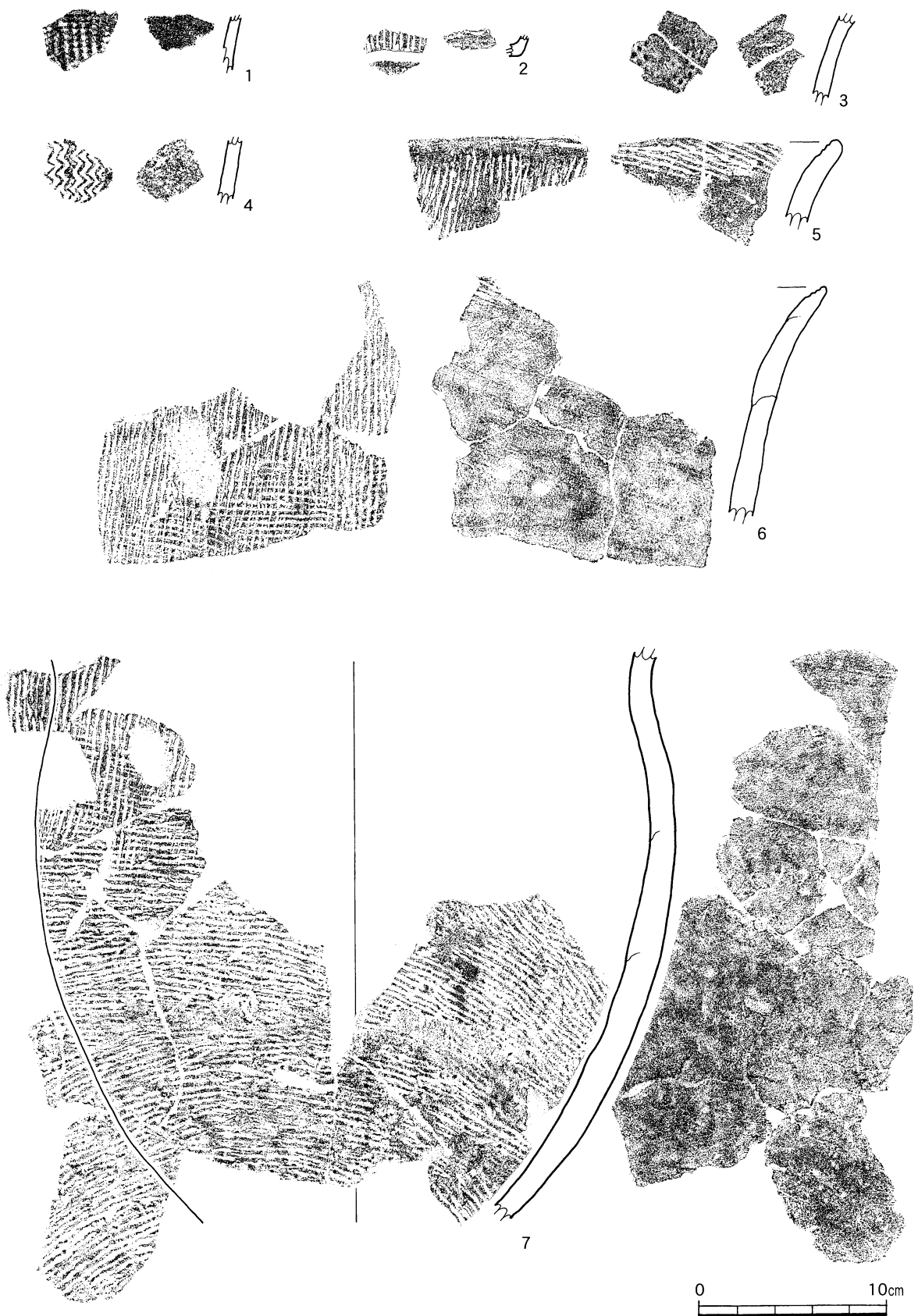
口縁部が外反し、口縁部に肋2条の縦位で深い貝殻刺突文と貝殻条痕文とを巡らせ、途中に貝殻条痕で円弧文を描くものもある。Ⅱ層からⅣ層にかけて出土している。接合作業後、資料数は22点となり13点を図化した。

10の口縁部には補修孔が見られ、主に外面からの穿孔でその形状は円穿孔である。11は口縁部片である。横位の貝殻条痕文を施文した後に円弧文が施文されている。12は横位の貝殻条痕文と貝殻刺突文とが上下に交互施文される。部分的に見られる縦位の貝殻条痕文は円弧文の一部と思われる。13は、10と比べると貝殻刺突文間の貝殻条痕文がやや不規則で部分的にナデ消されている。内面調整は、横位のナデで口唇部は入念にナデられている。15は、口縁部が外反する器形である。口唇部は丸みを呈し、肋2条の貝殻刺突文が巡るが、施文がはっきりとしない部分もある。文様は、横位の貝殻条痕文と貝殻刺突文とが施され、円弧文が縦位に3段重ねられている。この円弧文周辺には、貝殻条痕文がナデ消された痕跡が観察できる。14は口縁部片、16～22は胴部片である。

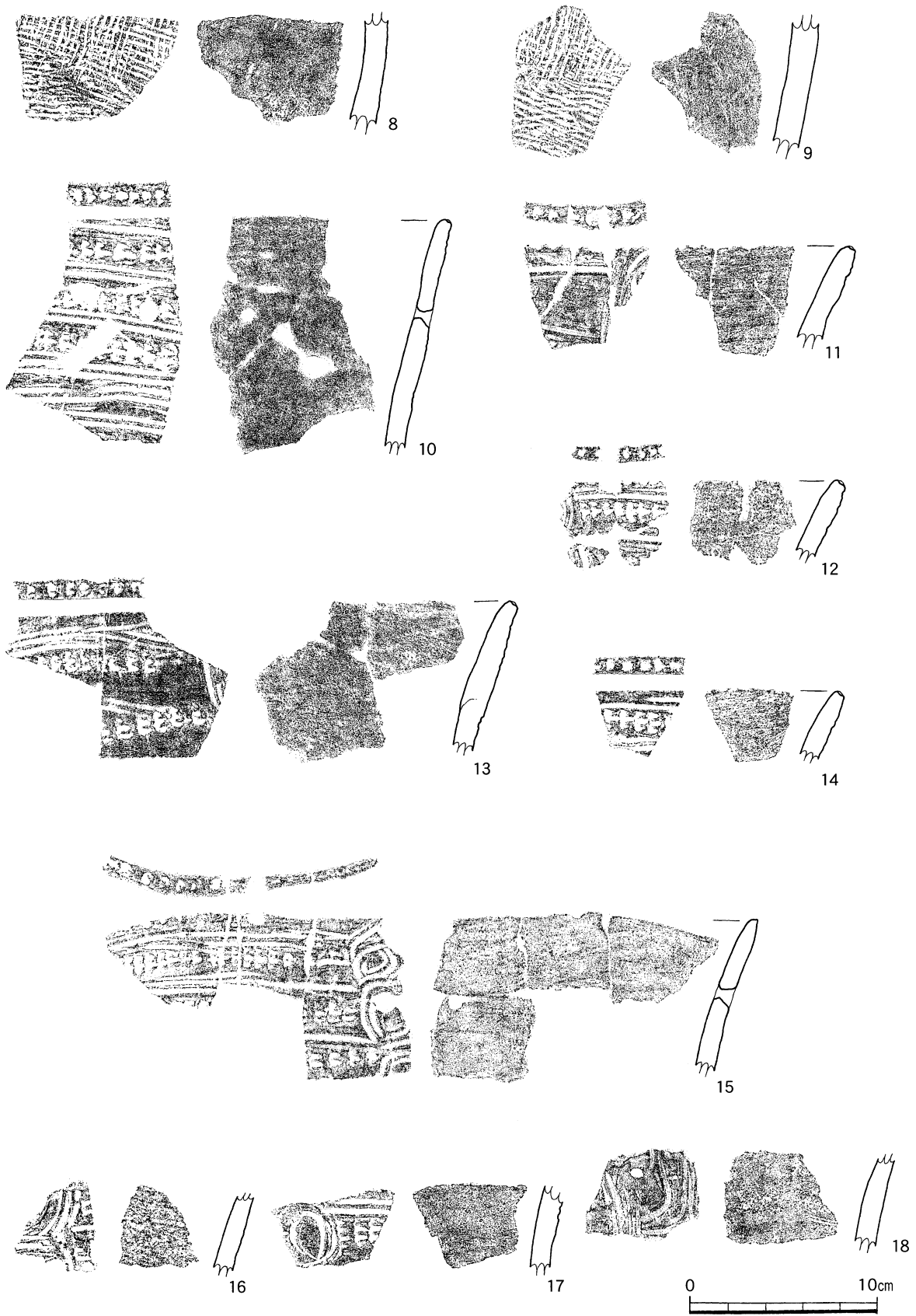
第5類 (第9図23～25)

口縁部下位に微隆起突帯文を施し、口縁部内面には貝殻刺突文による相交弧文を施す土器である。接合作業後、資料数は8点となり3点を図化した。

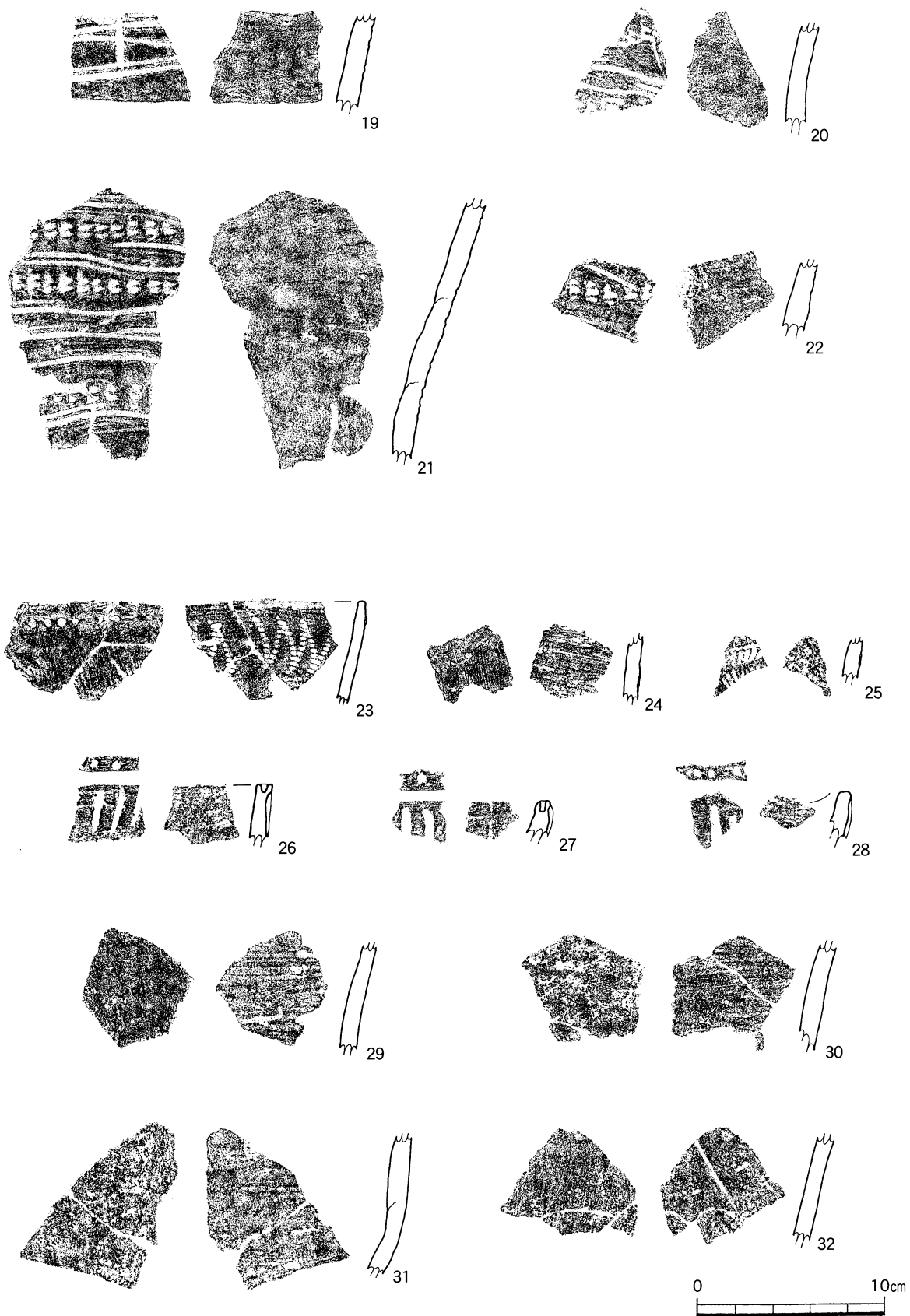
23は、口縁部と平行する微隆起突帯を貼り付けその頂部にキザミを施す。胴部には縦位に近い



第7図 縄文時代の土器実測図(1)



第8図 縄文時代の土器実測図(2)



第9図 縄文時代の土器実測図(3)

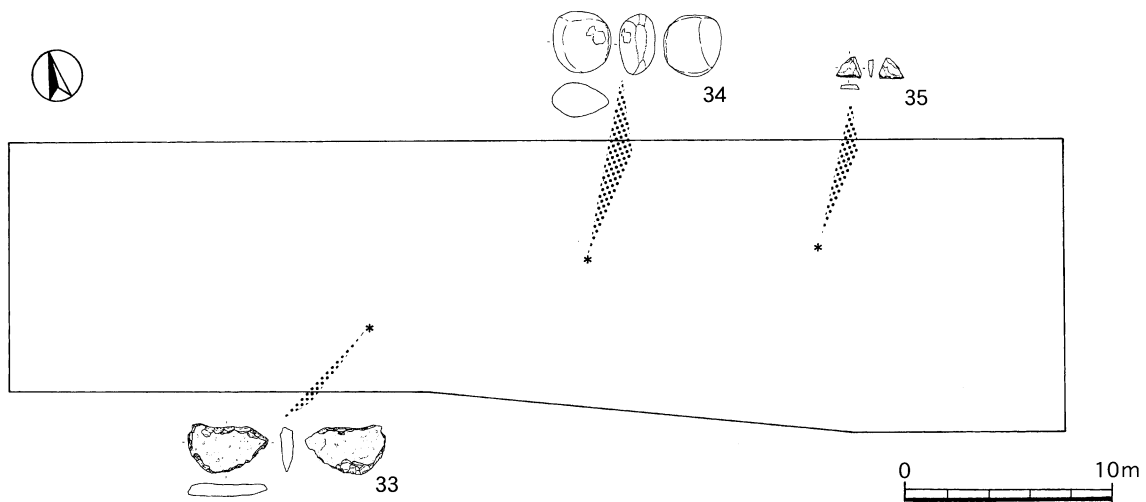
貝殻条痕文を施している。内面には横位の貝殻条痕文が見られ、その上から貝殻刺突による相交弧文が施される。外面にススの付着が見られる。24は、口縁部付近の破片と思われる。1 cm程度の粘土帯を薄く貼り付け、粘土帯の中心をナデることで上下に微隆帯状のものを作り出している。

第6類 (第9図26~32)

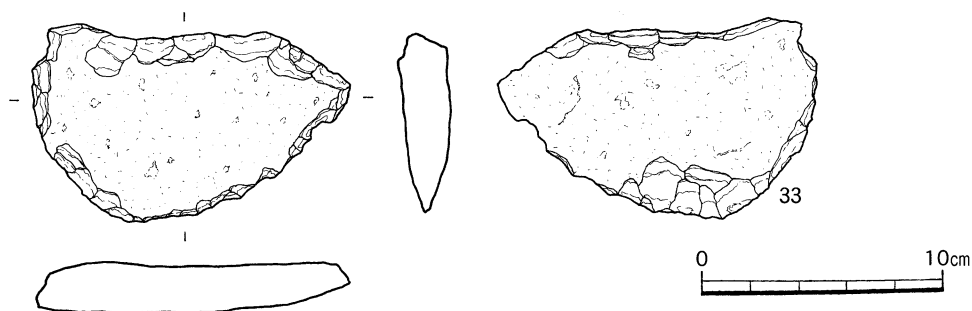
口縁部が直口ないし内湾する。口縁部外面に縦位に短い沈線文を施す。胴部は無文であると思われる。接合作業後、資料数は23点となり7点を図化した。26は、口唇部に深い連点文を施し、口縁部には棒状施文具による縦位の沈線文が施される。28は、口縁部片で波頂部と思われるが小破片のためはっきりとしない。29~32は胴部片である。無文ではあるが、胎土や色調などから当類に分類した。

② 石器

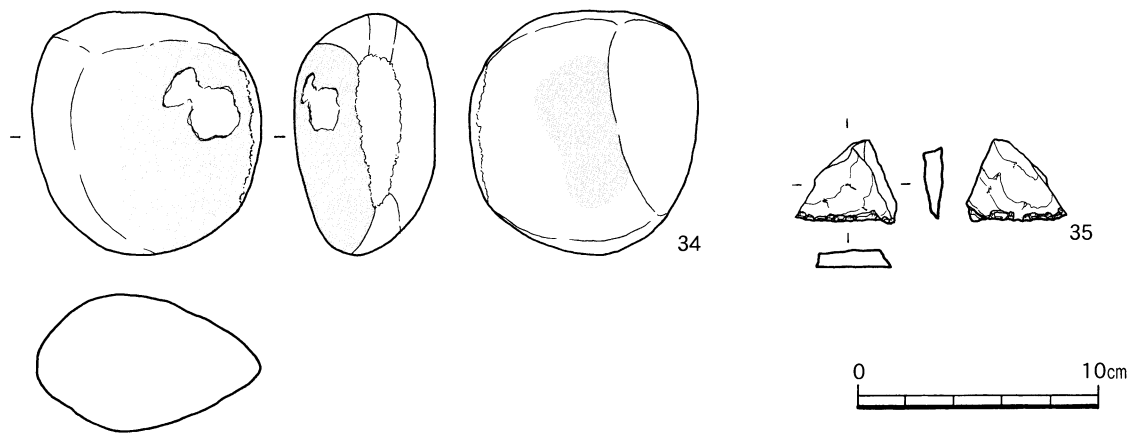
Ⅳ層中から礫器1点、Ⅲ層中から磨石とスクレーパーが1点ずつ出土し全てを図化した。33は、安山岩製の礫器である。風化が激しく不明瞭な部分も多い。34は安山岩製の磨石である。両面に磨りが見られ側面に敲打痕がある。また、火を受けたと見られる赤化が観察できる。35は、黒色頁岩製のスクレーパーで、小剥離によって刃部を形成している。



第10図 縄文時代の石器出土状況図



第11図 縄文時代の石器実測図(1)



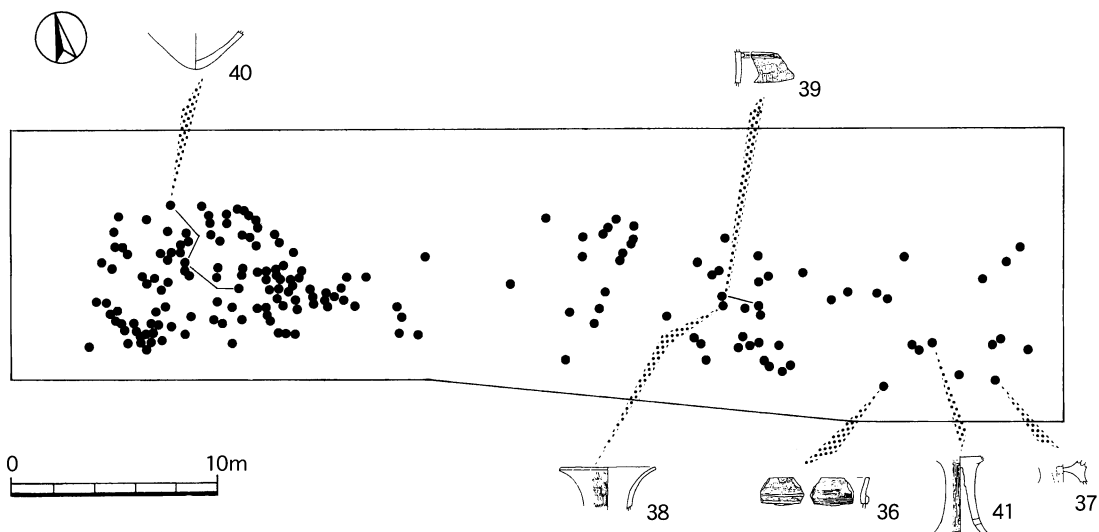
第12図 縄文時代の石器実測図(2)

(3) 弥生時代以降の調査

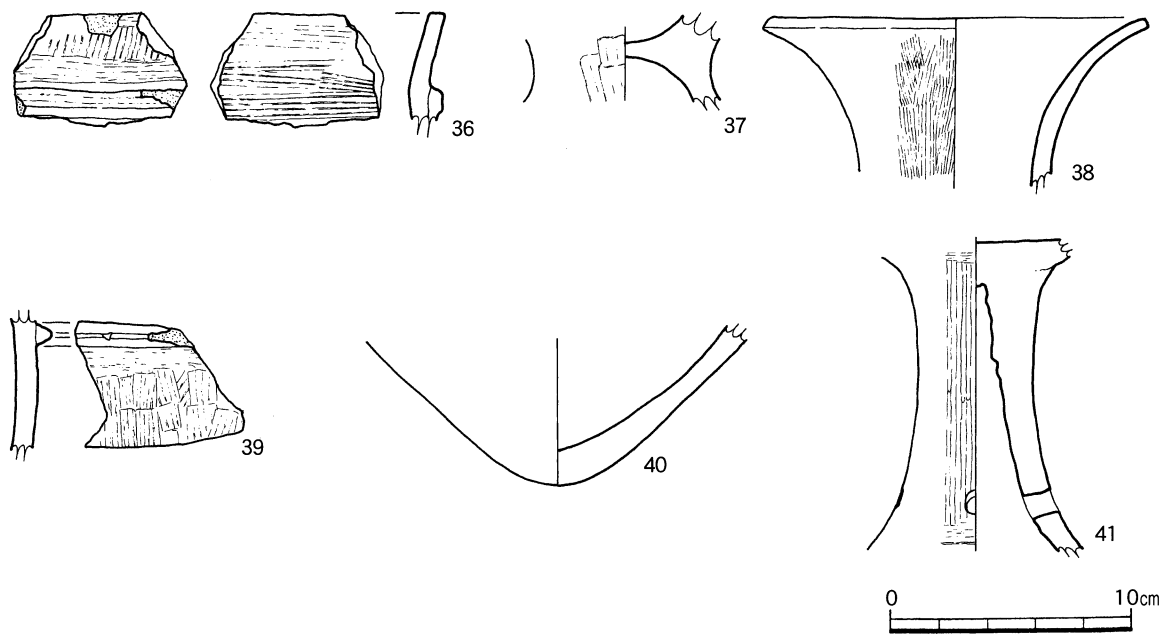
① 土器

Ⅱ層を中心にⅢ層にかけて土器片が出土している。いずれも小破片のため詳細ははっきりとしない。調査区西側に黒色土のプランが検出されたが、浅い落ち込みであることが判明した。この落ち込みに土器が集中して出土している。小破片も含めて204点が出土し、このうち6点を図化した。

36・37は、甕形土器である。36は、口縁部がやや外反し台形状の突帯がめぐる。弥生時代後期頃のものかと思われる。37は、脚の部分でケズリ痕が観察できる。成川式土器である。38～40は、壺形土器である。38は、口縁部が強く外反し口唇部は平坦面を持つ。外面には縦位にハケメが見られる。39は、胴部片である。台形状の突帯がめぐり、キザミ目を有するものと思われる。外面にはケズリ痕が見られ、突帯周辺では横位のナデが見られる。40は底部片である。いずれも成川式土器の範疇に収まるものと思われる。41は高坏である。円形の透かしがやや不規則に見られる。外面には、細い縦位のケズリ痕が見られ、透かし下位には横位の沈線状のものも見られるがはっきりとしない。



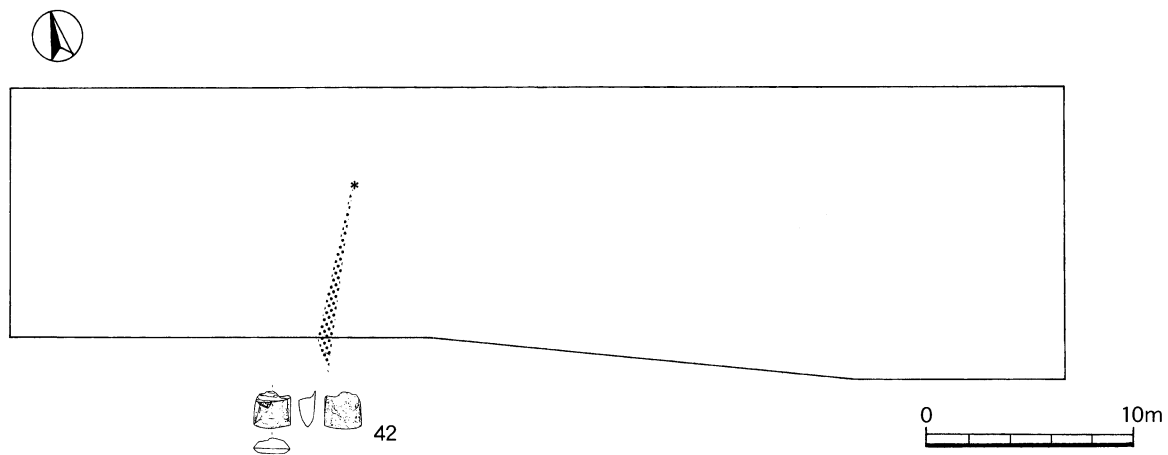
第13図 弥生時代以降の土器出土状況図



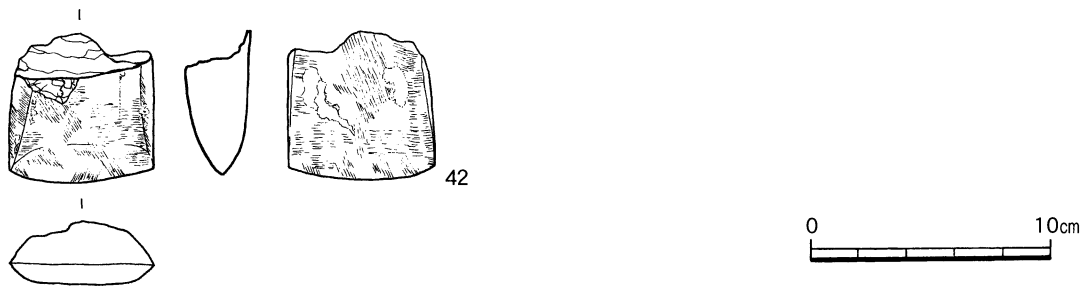
第14図 弥生時代以降の土器実測図

② 石器

石器は、Ⅱ層から磨製石斧が1点出土しているのみである。



第15図 弥生時代以降の石器出土状況図



第16図 弥生時代以降の石器実測図

縄文時代の土器観察表

挿 番 号	遺物 番号	層	色 調		調 整・施 文		胎 土	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面		
第7図	1	Ⅲ	暗茶褐色	暗茶褐色	貝殻押引文	ナデ	石英・長石	
	2	Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	細沈線文	ナデ	石英・長石	
	3	Ⅱ・Ⅲ	灰褐色	灰褐色	楕円押型文	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	4	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	山形押型文	ナデ	石英・長石	
	5	Ⅲ・Ⅳ	茶褐色	茶褐色	撚糸文	ナデ	石英	小礫を含む
	6	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	撚糸文	ナデ	石英	小礫を含む
	7	Ⅲ・Ⅳ	茶褐色	茶褐色	撚糸文	ナデ	石英	小礫を含む
第8図	8	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	撚糸文	ナデ	石英・カクセン石	小礫を含む
	9	Ⅳ	茶褐色	茶褐色	撚糸文	ナデ	石英・カクセン石	小礫を含む
	10	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	11	Ⅲ・Ⅳ	茶褐色	茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	12	Ⅲ	黒茶褐色	灰褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	13	Ⅲ・Ⅳ	茶褐色	茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	14	Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	15	Ⅲ・Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	16	Ⅲ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	17	Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
第9図	18	Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕文	ナデ	石英・長石	
	19	Ⅲ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕文	ナデ	石英・長石	
	20	Ⅱ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	21	Ⅲ・Ⅳ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	22	Ⅲ	黄茶褐色	黄茶褐色	貝殻条痕・貝殻刺突	ナデ	石英・長石	
	23	Ⅲ	黒褐色	暗茶褐色	貝殻条痕文	貝殻条痕	石英・長石	
	24	Ⅱ	黒褐色	暗茶褐色	貝殻条痕文	貝殻条痕	石英・長石・雲母	
	25	Ⅱ	黒褐色	暗茶褐色	貝殻条痕文	ナデ	石英・長石	
	26	Ⅲ	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	27	Ⅲ	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	28	Ⅲ	暗灰褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	29	Ⅱ	暗茶褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い・スス付着
	30	Ⅱ	暗茶褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	31	Ⅲ	暗茶褐色	暗灰褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	砂粒多い
	32	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	ケズリ	ナデ	石英・長石	砂粒多い

縄文時代の石器観察表

挿 番 号	遺物 番号	層	器 種	長 さ	幅	厚 み	重 量	石 材	備 考
第11図	33	Ⅳ	礫器	13.0cm	7.4cm	2.2cm	260 g	安山岩製	
第12図	34	Ⅲ	磨石	10.2cm	9.4cm	5.5cm	776 g	安山岩製	
	35	Ⅲ	スクレーパー	4.2cm	3.2cm	0.7cm	110 g	黒色頁岩製	

弥生時代以降の土器観察表

挿 番 号	遺物 番号	層	色 調		調 整・施 文		胎 土	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面		
第14図	36	Ⅱ	黒褐色	黒褐色	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	石英	
	37	Ⅱ	赤茶褐色	赤茶褐色	ケズリ・ナデ	ナデ	石英	
	38	Ⅲ	茶褐色	茶褐色	ハケメ・ナデ		石英	
	39	Ⅱ・Ⅲ	赤茶褐色	赤茶褐色			石英	
	40	Ⅱ	茶褐色	茶褐色			砂礫	小礫を含む
	41	Ⅱ	茶褐色	茶褐色	ケズリ	ナデ・ケズリ	砂礫	小礫を含む

弥生時代以降の石器観察表

挿 番 号	遺物 番号	層	器 種	長 さ	幅	厚 み	重 量	石 材	備 考
第16図	42	Ⅱ	石斧	5.0cm	6.0cm	2.5cm	122 g	頁 岩	

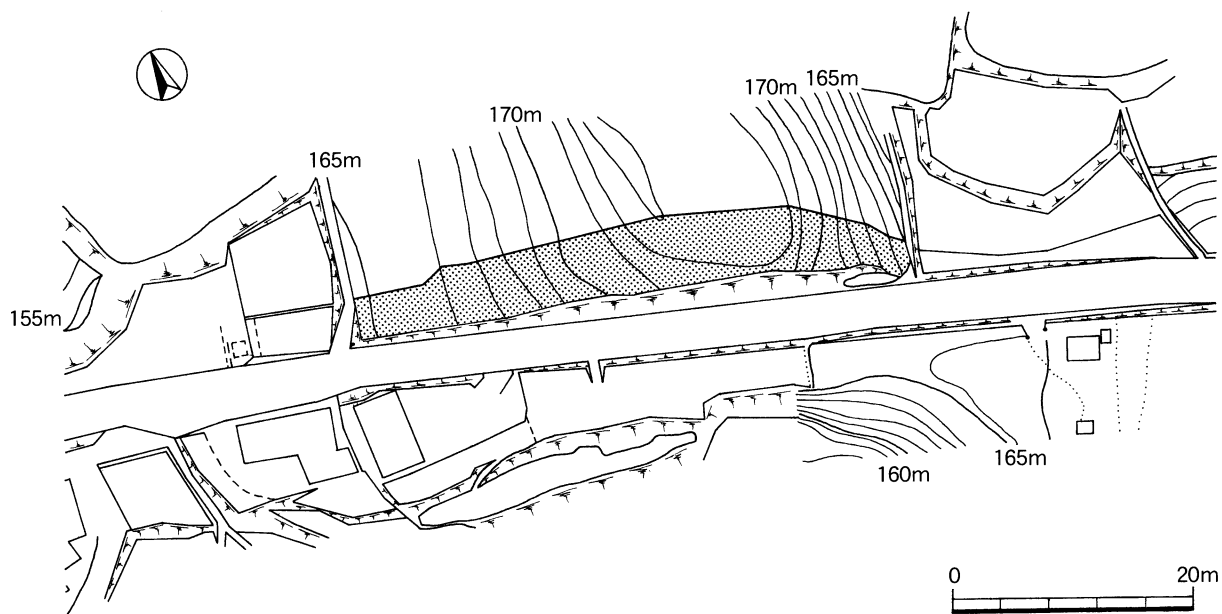
第4章 竹ノ山B遺跡の調査

第1節 調査の概要

調査は平成10年9月29日から10月13日まで実施した。調査範囲は断面に露出していた陥し穴状の遺構を起点として西側約40m、幅約5mの約200㎡である。

調査は薩摩火山灰層（VI層）までを重機で除去し、VII a層から人力による掘削を行った。調査手順はVII a層上面での遺構精査、コンタ図作成、第1～第3トレンチ設定、掘り下げ、第1トレンチ周辺の千鳥調査、拡張、並行して1号・2号陥し穴の掘り下げ、実測の順で行った。詳細を以下に述べる。

VII a層上面で遺構精査を行ったところ、1号陥し穴から西側へ約30m地点に楕円形に薩摩火山灰層の落ち込みが確認され、2基の陥し穴を想定して調査を行った。当初、調査範囲内にトレンチを3ヶ所設定し、遺物の出土状況の確認を行った。1トレンチにのみ遺物の出土が認められたため、1トレンチを中心に2×2mの小区画を設定し、千鳥格子目状に掘り下げ、遺物の出土した範囲を広げた。その結果、VII a下層を中心に33点の石器が出土した。



第17図 竹ノ山B遺跡周辺地形図

第2節 層序

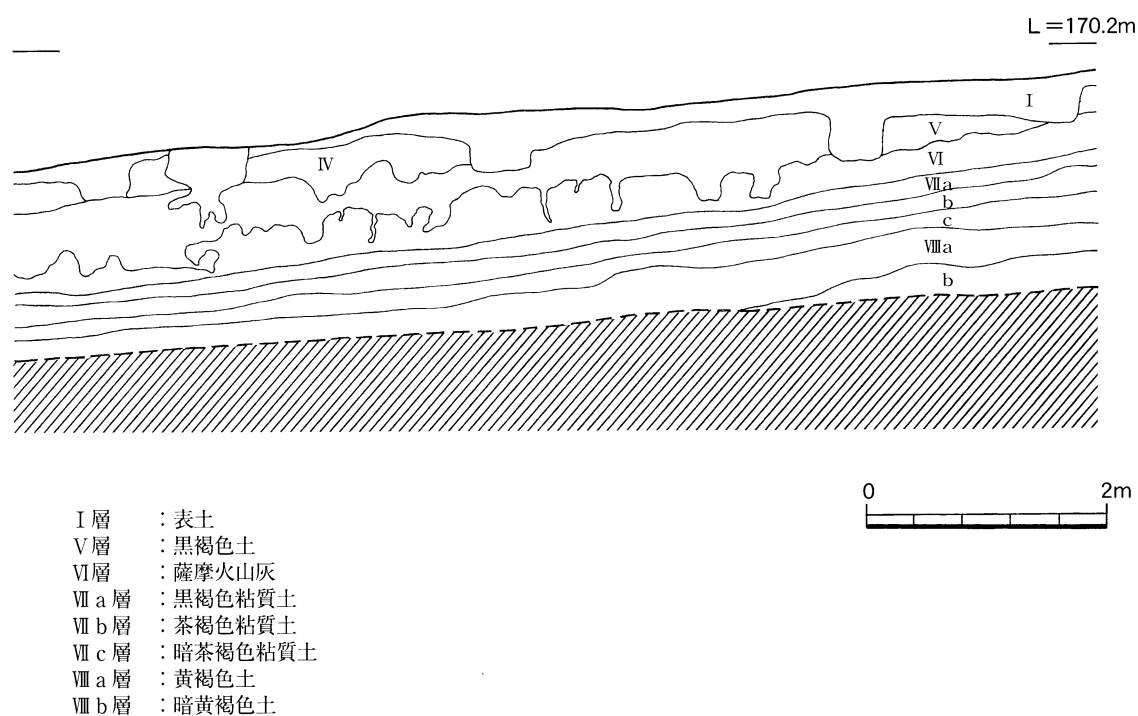
竹ノ山B遺跡の土層は、一般的な薩摩半島中央部の台地の基本土層を反映しているため、基本土層は当地地の基本土層を示し、それに本遺跡の地層を照らし合わせる形で提示する。本遺跡では特にチョコ層（Ⅶ層）の堆積は非常によく、3枚にきれいに分層される。2号陥し穴のある遺跡地西側では、Ⅶb層相当部分に二次的なシラス状の地層が80cm程度堆積しており、Ⅶc層以降の時期に高いところからの土砂流入があったことを示している。遺跡地内はⅢ層までが削平されており、Ⅴ層以下が残存していた。縄文時代の遺物の出土は見られなかった。遺物包含層はⅦa層下部からⅦc層までで、内訳は、Ⅶa層上部1点、Ⅶa層下部20点、Ⅶb層9点、Ⅶc層3点である。なお、表層から包含層上面までの厚さは約60cmである。

土層断面は調査区の北側を実測し、図化した。

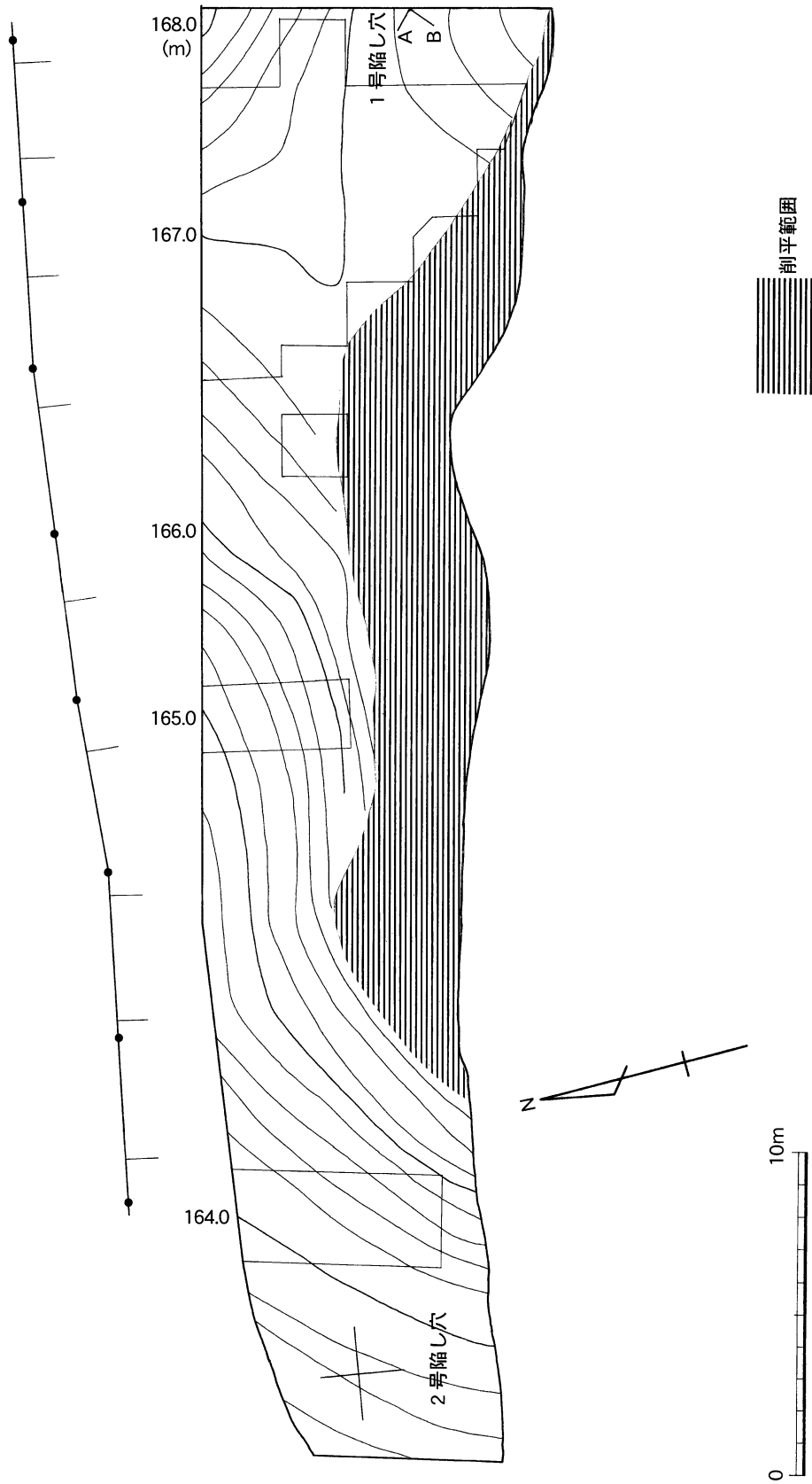
第3節 調査の成果

(1) 遺構

遺構は、陥し穴2基が検出されている。1号陥し穴と2号陥し穴との間隔は約30mである。1号・2号陥し穴の立地は、それぞれ南東の緩斜面、南西の緩斜面である。詳細については以下のとおりである。



第18図 竹ノ山B遺跡土層断面図



第19図 VIIa層上面コンタ図・トレンチ配置図・1号, 2号陥し穴位置図

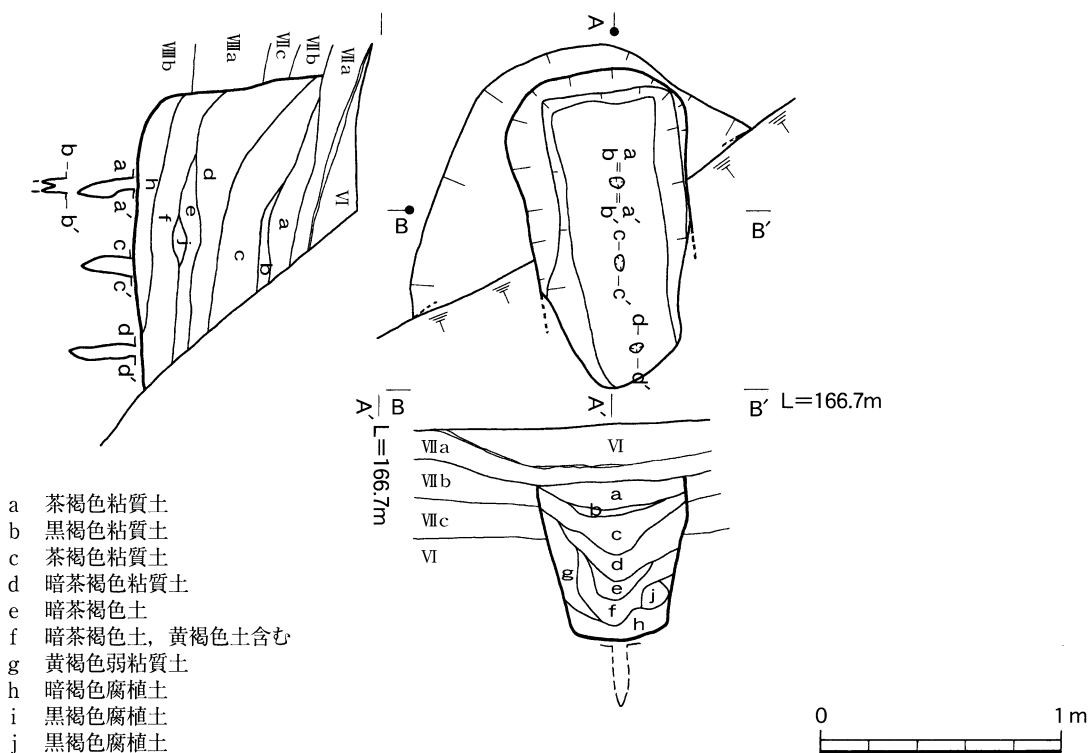
1号陥し穴（第20図）

1) 概要

1号陥し穴は、道路工事中の法面に切られていたものである。残存率は検出面で2分の1、底部はほとんどが残存していた。上面プランは隅丸長方形を呈し、検出ラインの長軸が（85）cm、短軸が70cm、底面の長軸が（120）cm、短軸が40cm、深さが66cmである。底には逆茂木のピットが3基確認され、うち1基からは横からのスライスの過程で2又状の茂木痕が確認された。

2) 調査の方法

調査はまず検出プランから十字状に水糸を設定し、4分の1をくり貫く形で行った。黄褐色土の地山に茶褐色の埋土であったためくり貫きは比較的容易に行えた。くり貫いた写真の撮影後、短軸半分の断面写真、実測を行った。次に二分の一をくり貫き写真撮影を行った。次に半裁を横からスライスを繰り返して行い、底面のピット確認を行った。スライスの過程でピット1基を確認し、更にそのピットのスライス途中で2又状の茂木痕が確認されたため、実測、写真撮影を行った。半裁終了段階で長軸側の断面の写真撮影、実測を行い、残り半分の短軸断面実測後、埋土をくり貫いた。写真撮影後、底面のピット検出を行ったところ2基のプランが確認され、横からのスライスにより最終確認を行った。スライスの過程で、1基は樹痕であることが判明し、もう1基はピットであることが判明した。また、底面では検出できなかったところでスライスにより新たにピット1基が検出された。全ての実測を行い、調査を終了した。



第20図 1号陥し穴実測図

3) 埋土観察

埋土は長軸・短軸共に中央が窪んだ状態で確認されている。そのため検出時には薩摩火山灰の大きな落ち込みにより確認できる。上部から下部まで全体的に暗茶褐色系統の色調を呈しており、掘り込みラインの判別は容易であった。

2号陥し穴（第21図）

1) 概要

2号陥し穴はⅥ層を重機で剥いだ後、遺構検出の段階で楕円状の薩摩火山灰の落ち込みにより確認された。検出プランは隅丸長方形を呈し、上面プランは長軸が160cm、短軸130cm、底面プランは長軸が120cm、短軸が56cm、深さが86cmである。底には逆茂木のピットが3基確認された。

2) 調査の方法

1号陥し穴同様検出プランから十字状に水系を設定し、四分の一のくり貫きを行った。黄褐色の地山に黄褐色の埋土であったためくり貫きは困難で、試行錯誤のもとに行われた。写真撮影・実測後、二分の一のくり貫きを行った。くり貫きの過程で軸のずれを修正し調査を継続した。二分の一のくり貫き終了後、写真撮影・断面実測を行い、底面でのピット検出を行った。丁寧に精査を行うものの、上面からのピット検出は出来ず、横からのスライスを行った。スライスを行う過程で、微妙な色調の差異からピットが3基検出され、写真撮影、実測を行い、調査を終了した。

3) 埋土観察

埋土は、長軸・短軸共に中央が窪んだ状態で確認されている。そのため検出時には薩摩火山灰の大きな落ち込みにより確認できる。上部は暗茶褐色系統で、下部は黄褐色系統の色調を呈しており、下部の掘り込みライン、逆茂木は地山のシラス二次堆積土との判別が難易である。特に逆茂木については底面からの検出では確認できず、横からのスライスによりようやく確認できる程度の色調の差異であった。

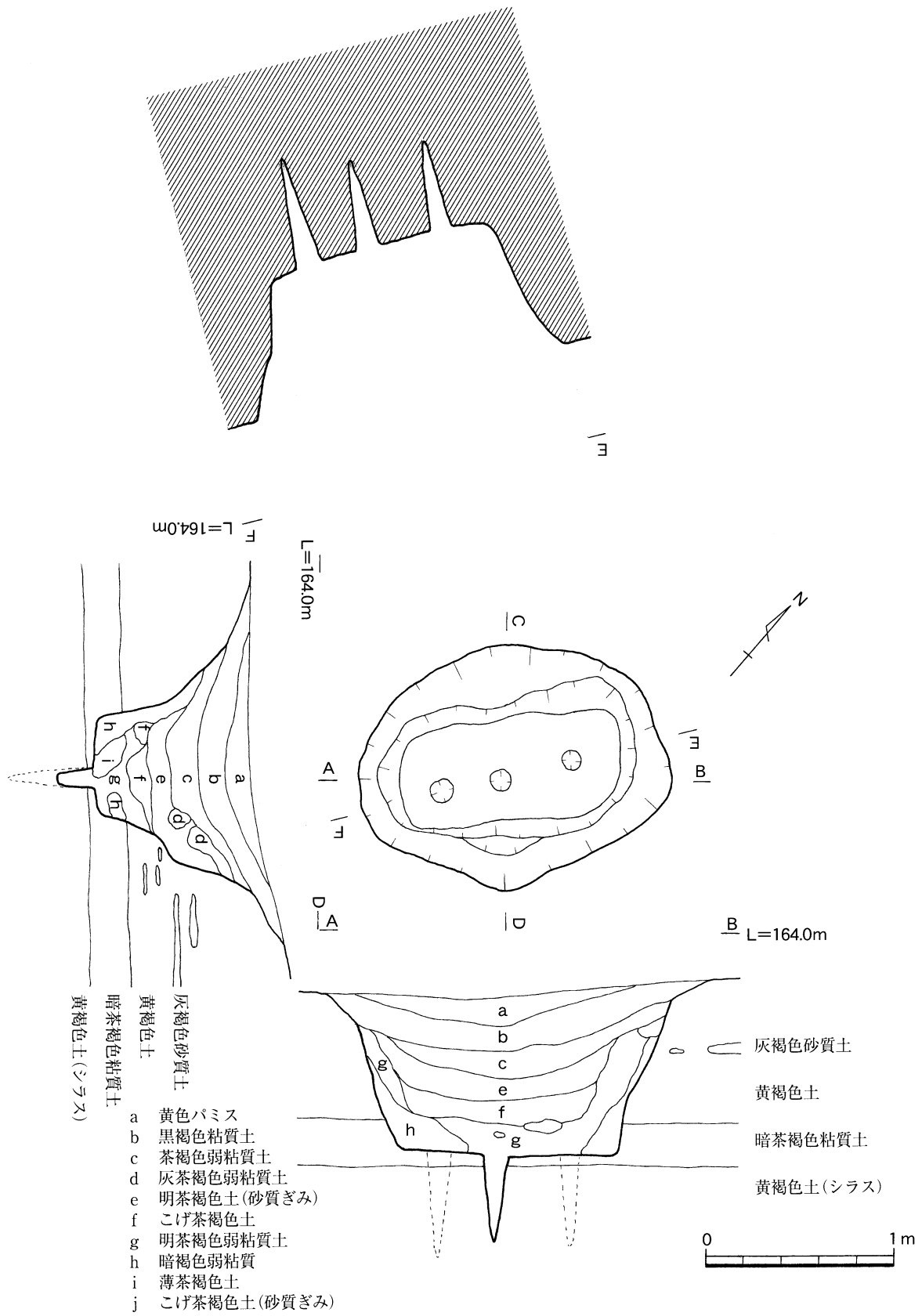
(2) 遺物

遺物はⅦa下層を中心に33点が出土した。すべて黒曜石で、小型の剥片・碎片がほとんどである。定型石器の出土は見られなかった。全て小片のため、図化は行わなかった。各石器の特徴は観察表のとおりである。出土した石器総重量を合わせても16.5gで、中型の消しゴム1個分程度の重さである。

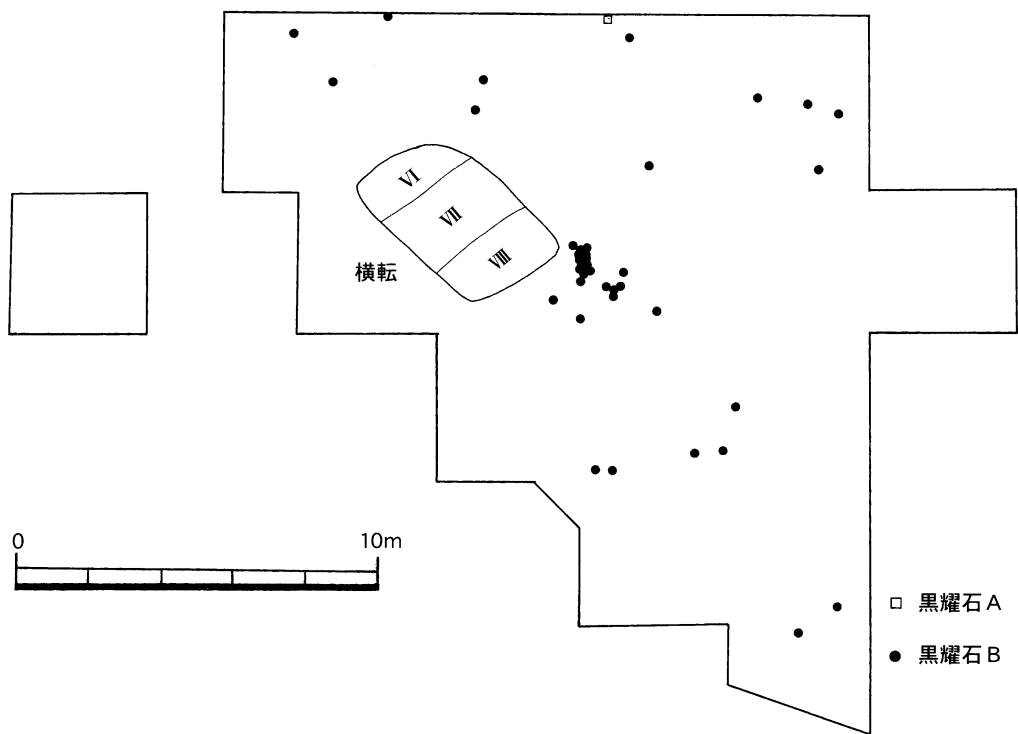
1) 石材

黒曜石A—色調は漆黒で、表面に光沢の見られない黒曜石である。肉眼による表面観察より薩摩郡樋脇町上牛鼻産の黒曜石である可能性が高い。本遺跡では1点のみの出土である。石材重量は6.13gである。

黒曜石B—色調はアメ色を呈し、所々に白い不純物が混ざる。肉眼による表面観察より鹿児島市竜ヶ水の三船産黒曜石である可能性が高い。本遺跡の出土黒曜石はほとんどがこの類のものであり、33点中32点を占める。石材総重量は10.37gである。



第21図 2号陥し穴実測図



第22図 VIIa~VIIc層 遺物出土状況

2) 石 器

石器は先述したとおり、小型の剥片・碎片がほとんどである。碎片は不純物の部分からはじけたものがほとんどである。剥片については石核か何かの調整剥片であり、剥片の背面構成から打面固定の石核ではなく、打面転移を行っている石核であることが予想される。いずれにしても遺物の出土が少なく、小片が多いため石器観察からは多くを語ることは出来ない。

第3表 竹ノ山遺跡石器計測表

(単位：mm)

番号	取上番号	遺物	出土層位	石 材	長さ	幅	厚さ	重 量	備 考
1	2	碎片	VII a 下	白瑪瑙	10	5	1	0.05 g	
2	3	碎片	VII a 下	黒曜石B	3	3	2	0.09 g	
3	4	碎片	VII a 下	黒曜石B	3	6	3	0.16 g	礫皮面残存
4	5	剥片	VII a 下	黒曜石B	12	22	5	0.76 g	
5	6	碎片	VII a 下	黒曜石B	10	4	3	0.11 g	
6	7	碎片	VII a 下	黒曜石B	8	15	3	0.22 g	
7	8	碎片	VII a 下	黒曜石B	10	13	6	0.59 g	
8	9	剥片	VII a 下	黒曜石B	21	9	8	1.40 g	
9	10	剥片	VII a 下	黒曜石B	15	16	4	0.75 g	
10	12	碎片	VII a 下	黒曜石B	7	9	3	0.14 g	
11	13	剥片	VII a 下	黒曜石B	16	14	5	0.86 g	
12	14	剥片	VII a 上	黒曜石A	26	22	13	6.13 g	
13	20	碎片	VII a 下	黒曜石B	9	5	2	0.10 g	
14	21	剥片	VII b	黒曜石B	14	15	2	0.36 g	
15	22	碎片	VII b	黒曜石B	8	13	3	0.24 g	礫皮面残存
16	23	剥片	VII a 下	黒曜石B	13	12	5	0.46 g	
17	24	碎片	VII a 下	黒曜石B	9	5	1	0.06 g	
18	25	剥片	VII b	黒曜石B	13	15	5	0.53 g	
19	26	碎片	VII b	黒曜石B	9	6	2	0.07 g	
20	27	碎片	VII a 下	黒曜石B	12	6	4	0.22 g	
21	28	碎片	VII a 下	黒曜石B	2	1	0.5	0.01 g	
22	29	碎片	VII b	黒曜石B	11	3	2	0.04 g	
23	30	碎片	VII b	黒曜石B	5	4	2	0.02 g	
24	32	碎片	VII a	黒曜石B	11	10	3	0.20 g	
25	33	碎片	VII b	黒曜石B	8	3	1	0.02 g	
26	34	碎片	VII b	黒曜石B	9	17	5	0.75 g	
27	35	剥片	VII a 下	黒曜石B	9	11	2	0.15 g	
28	36	碎片	VII a 下	黒曜石B	11	7	5	0.31 g	
29	37	剥片	VII b	黒曜石B	13	10	5	0.70 g	
30	39	剥片	VII c	黒曜石B	14	12	5	0.60 g	
31	40	碎片	VII c	黒曜石B	5	8	4	0.11 g	
32	42	碎片	VII c	黒曜石B	8	5	2	0.05 g	
33	43	剥片	VII a 下	黒曜石B	6	24	2	0.24 g	

第5章 調査のまとめ

第1節 竹ノ山A遺跡

第1類としたものは、南九州貝殻文系土器と総称される土器で貝殻押引文が見られることから吉田式土器の範疇で捉えられる。吉田式土器は、河口貞徳氏によって型式設定された土器である。椿ノ原6類の発見によって型式の混乱が見られたが、新東晃一氏の狭義の吉田式土器と河口氏の吉田式土器とはほぼ同一と思われる。問題は、様式・型式・形式の捉え方であろう。小林達雄氏によると様式とは、「共通の気風」であり（小林 1977）南九州貝殻文系土器にこれを用いる場合、従来の前平式・吉田式・石坂式に様式を当てはめるのではなく、「貝殻文」に「共通の気風」を用いた方が現段階では理解しやすいと考えられる。

第2類は、押型文土器を一括した。

第3類は、撚糸文土器である。南九州における撚糸文土器の様相は、資料等の少なさなどから不明瞭で型式設定されるに至ってはいない。また、どの段階から撚糸文土器が南九州に見られるのかその初源に関しては論究されたことがない。撚糸文土器は、当遺跡で出土したタイプのものや五十市式土器と呼ばれるもの・変形撚糸文土器と呼ばれるものなどがある。変形撚糸文土器には、器面に押型文と共に施文されているものもあり、河口貞徳氏によって石峰式土器と呼ばれている。これまでの出土状況は、早期前葉段階の土器と共伴する例は希で下剥峯式土器や桑ノ丸式土器といった南九州貝殻文系土器の後半のものや平椿・塞ノ神式土器などと共に出土している。これは、押型文土器の出土傾向に概ね類似しており、現段階では撚糸文土器は中葉から後葉といった幅の中で位置付けられるものと思われる。

第4類は、貝殻文系の塞ノ神式土器である。塞ノ神式土器は、木村幹夫氏によって命名され、その後、河口氏や新東氏をはじめ多くの研究論文が発表されている。編年的な位置づけは、2系統論をはじめ様々な編年が示されており確定していない。だが、近年の発掘調査ではP-11火山灰などの鍵層が発見され、層位的に塞ノ神式土器の編年が提示出来る事例も増加しつつある。

第5類は、深浦式系土器と思われる。深浦式土器は、小林久雄・住谷正節両氏によって型式設定された土器で（小林・住谷 1940）、河口氏によって再設定された土器である（河口 1980）。しかし、深浦式土器という名称は、東和幸氏の「轟式土器と曾畑式以外の縄文前期土器を深浦式と呼んでいるようである」という指摘にあるように（東 1991）型式概念は広く認識されている場合が多い。

第6類は、出水式系土器と思われる。

以上、縄文時代の土器は第1類から第6類まで分類した。だが、いずれの資料もまとまった出土ではなく当遺跡では各土器型式の抱える問題点を解決するには至らなかった。

縄文時代の石器は、全体で3点のみの出土で、これ以外には黒曜石の剥片類がわずかに出土したに留まった。ただし、この中には肉眼観察で淀姫系かと思われるものが1点含まれており、当時の交流を示すと共に周辺での石器製作の可能性を含んでいる。

弥生時代以降の調査では、甕・壺・高坏が出土している。いずれも小破片のため全体像をつかみきれなかった。石器は、磨製石斧の刃部片が1点出土している。

第2節 竹ノ山B遺跡

1) 出土遺物について

本編でも述べたとおり、遺物は全て小型の剥片、碎片であった。石器は全て調整剥片であり、背面観察から打面転移が頻繁に行われていることが観察される。遺物の帰属する時期については石器観察からは特定できないが、遺物の出土層位はⅦ a 下層を中心としており、これを手がかりとしたい。遺跡の立地する台地の他遺跡の状況を観察すると、松元町石谷の西ノ原B遺跡ではⅦ b 層から小型のナイフ形石器が出土している。また、同町石谷の前山遺跡ではⅦ a 下層からⅦ b 層にかけて小型の台形石器、ナイフ形石器が出土している。また、同町福山の前原遺跡からはⅦ c 層より小型の台形石器が出土している。その他Ⅶ a 層からは多くの遺跡で細石器文化期の石器を出土している。以上の層位的状況を考えると、本遺跡の遺物はナイフ形石器文化期終末～細石器文化期の初段階に帰属することが考えられる。

2) 陥し穴について

本遺跡では陥し穴遺構が2基検出された。旧石器時代の陥し穴遺構を検出した遺跡としては県内では日置郡松元町の仁田尾遺跡、入来町浦之名の鹿村ヶ迫遺跡、出水市上場の大久保遺跡に次いで4遺跡目である。時期的には掘り込み面がⅦ b 層であること、遺物の出土層位がⅦ a 下層を中心としていることなどからナイフ形石器文化期終末から細石器文化期初段階に帰属することが考えられる。該期の陥し穴を検出した例は九州では南九州、特に宮崎県で多く検出されており、宮崎では別府原遺跡、上ノ原遺跡、下屋敷遺跡、垂水第1遺跡、南学原第2遺跡などで多数確認されている(日高広人1995・1998)。各遺跡の陥し穴遺構と本遺跡の陥し穴遺構と比較すると、本遺跡から一番近い仁田尾遺跡の陥し穴遺構が形態的に一番類似している。仁田尾遺跡は陥し穴遺構が16基検出されており、そのうち1基が図化されているが、プランは隅丸長方形、底面には3基の逆茂木のピットが確認されており、本遺跡の様相と酷似している。南九州に多数存在する該期の陥し穴遺構の中で、同じ台地上で、距離的にも一番近い仁田尾遺跡の例と酷似している点は非常に興味深いものである。

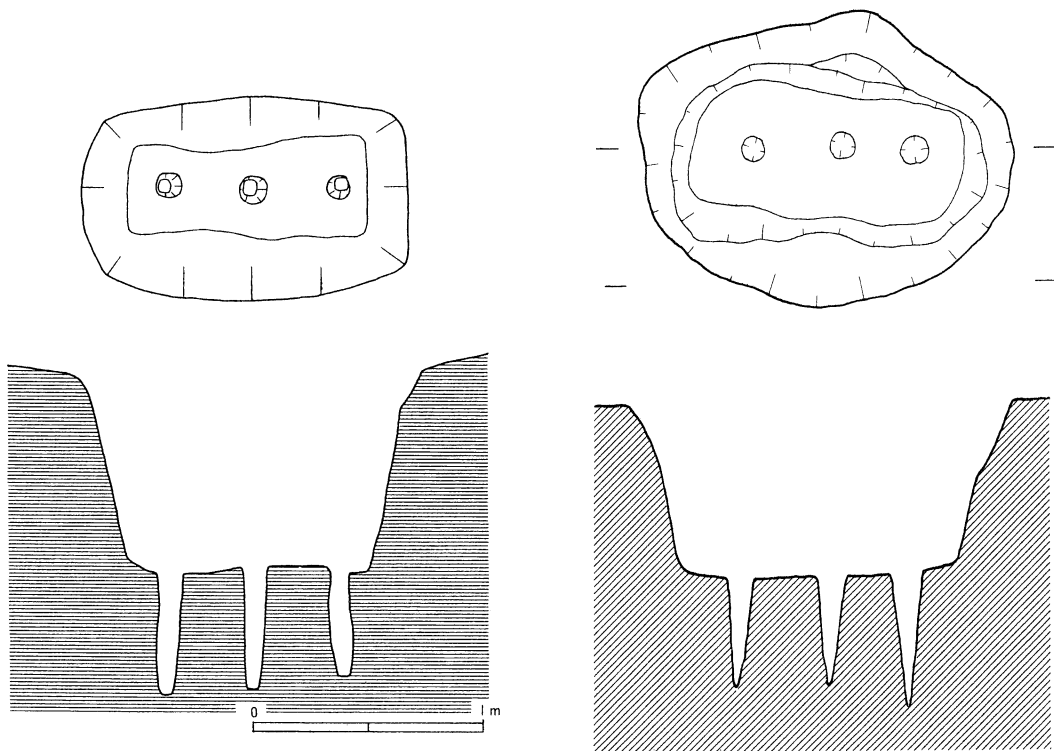
各遺跡の概要は次のとおりである。

参考文献

- 河口貞徳 1972 「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』6号 鹿児島県考古学会
1980 「石峰遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 鹿児島県教育委員会
- 小林達雄 1977 「型式・様式・形式」『日本原始美術大系』1 講談社
- 小林久雄・住谷正節 1940 「薩摩国枕崎町花渡川遺跡」『考古学』11(3)
- 東 和幸 1991 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』No.5
- 日高広人 1995 「陥し穴(宮崎県)」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会
1998 「九州における細石器文化期の遺構について」
『九州の細石器文化－九州島における細石器文化の石器と技術－』
- 宮田栄二 1996 「鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡」『日本考古学年報』47 日本考古学会

第4表 南九州の陥し六一覧表

遺跡名	所在地	平面プラン	長径	短径	深さ	逆茂木			
						数	位置	径	深さ
竹ノ山B1号	日置郡伊集院町竹ノ山	隅丸長方形	(85)	70	66	3	中央縦列	4・8・4	24・20・28
竹ノ山B2号	日置郡伊集院町竹ノ山	隅丸長方形	160	130	86	3	中央縦列	10・10・12	50・46・60
仁田尾	日置郡松元町石谷	隅丸長方形	150	80	80	3	中央縦列	12・12・8	52・52・44
鹿村ヶ迫1号	薩摩郡入来町浦之名	略長方形	94	62	(22)	2	中央縦列	20・20	44・48
鹿村ヶ迫2号	薩摩郡入来町浦之名	略長方形	90	65	(10)	3	底面周囲	16・12・20	36・20・12
大久保	出水市上大川内	長楕円形	208	72	92	7	中央縦列	8・10	28・16
上ノ原24号	宮崎県佐土原町西上那珂	隅丸長方形	114	86	107	2	中央縦列	20・10	63・50
上ノ原20号	宮崎県佐土原町西上那珂	隅丸長方形	86	55	103	9	中央		
垂水第1W-10	宮崎県宮崎市	長楕円形	142	61	137	0	—	—	—
垂水第1M-1	宮崎県宮崎市	略円形	120	92	152	0	—	—	—
別府原S38	宮崎県西都市	隅丸方形	89	40	149	0			
別府原S79	宮崎県西都市	隅丸方形	68	54	110	1	中央	22	35
別府原S87	宮崎県西都市	楕円形	77	56	166	0			
別府原S105	宮崎県西都市	隅丸方形	45	42	141	1	中央	10	23
別府原S106	宮崎県西都市	隅丸長方形	107	79	135	1	中央	12	49
別府原S108	宮崎県西都市	隅丸長方形	102	18	133	0			
別府原S121	宮崎県西都市	隅丸長方形	85	43	109	0			
別府原S122	宮崎県西都市	隅丸長方形	108	39	135	0			
別府原S123	宮崎県西都市	円形	76	72	134	0			
別府原S124	宮崎県西都市	隅丸長方形	90	58	257	0			
別府原S126	宮崎県西都市	隅丸長方形	52	35	163	0			
別府原S140	宮崎県西都市	隅丸長方形	117	60	160	0			
別府原S148	宮崎県西都市	円形	46	40	60	2	中央		
別府原S155	宮崎県西都市	楕円形	81	61	173	0			
別府原S168	宮崎県西都市	円形	56	50	126	6	不規則		
別府原S219	宮崎県西都市	隅丸長方形	66	44	132	10	不規則		
別府原S194	宮崎県西都市	隅丸長方形	62	28	46	0			



松元町仁田尾遺跡の陥し穴

伊集院町竹ノ山B遺跡の陥し穴

第23図 仁田尾遺跡と竹ノ山B遺跡の陥し穴

圖 版



竹ノ山A遺跡遺物出土状況



竹ノ山A遺跡土層断面



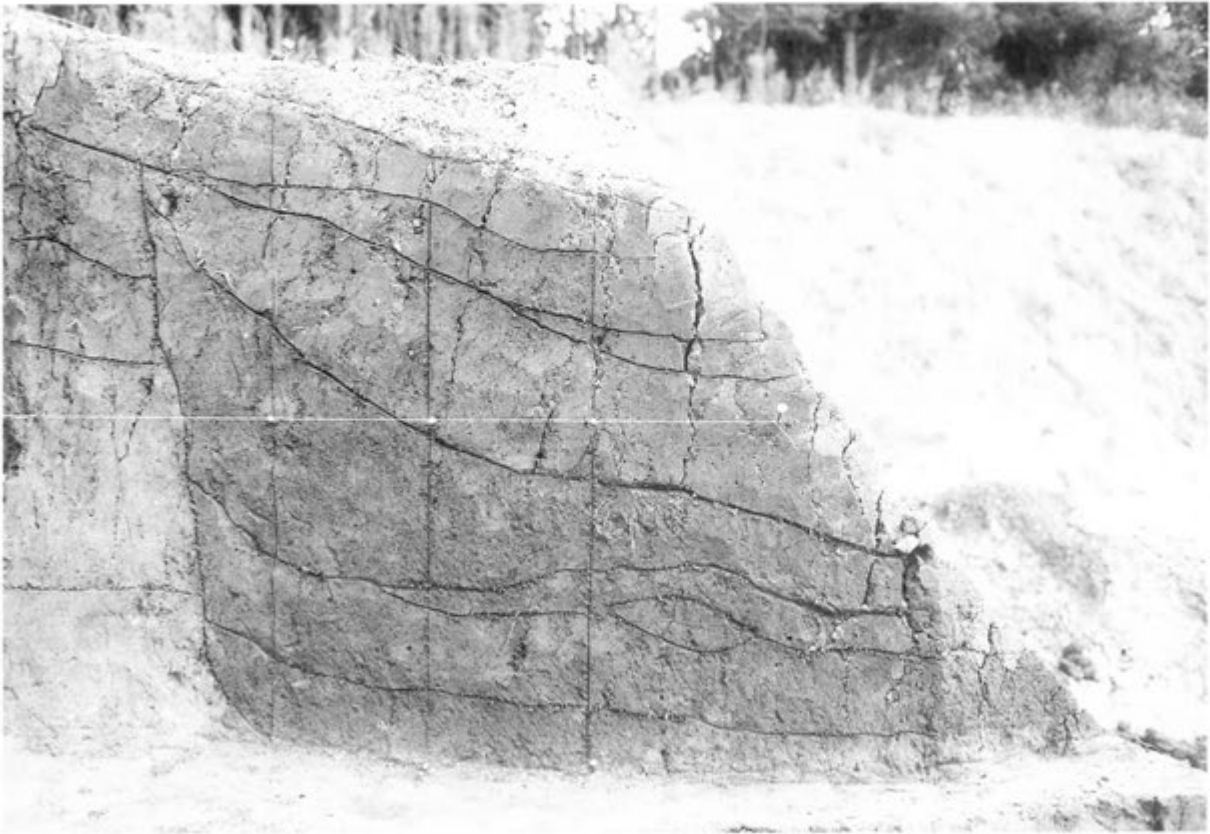
竹ノ山B遺跡作業風景



竹ノ山B遺跡土層断面図



竹ノ山B遺跡完掘状況



1号陥し穴埋土状況



1号陥し穴完掘状況

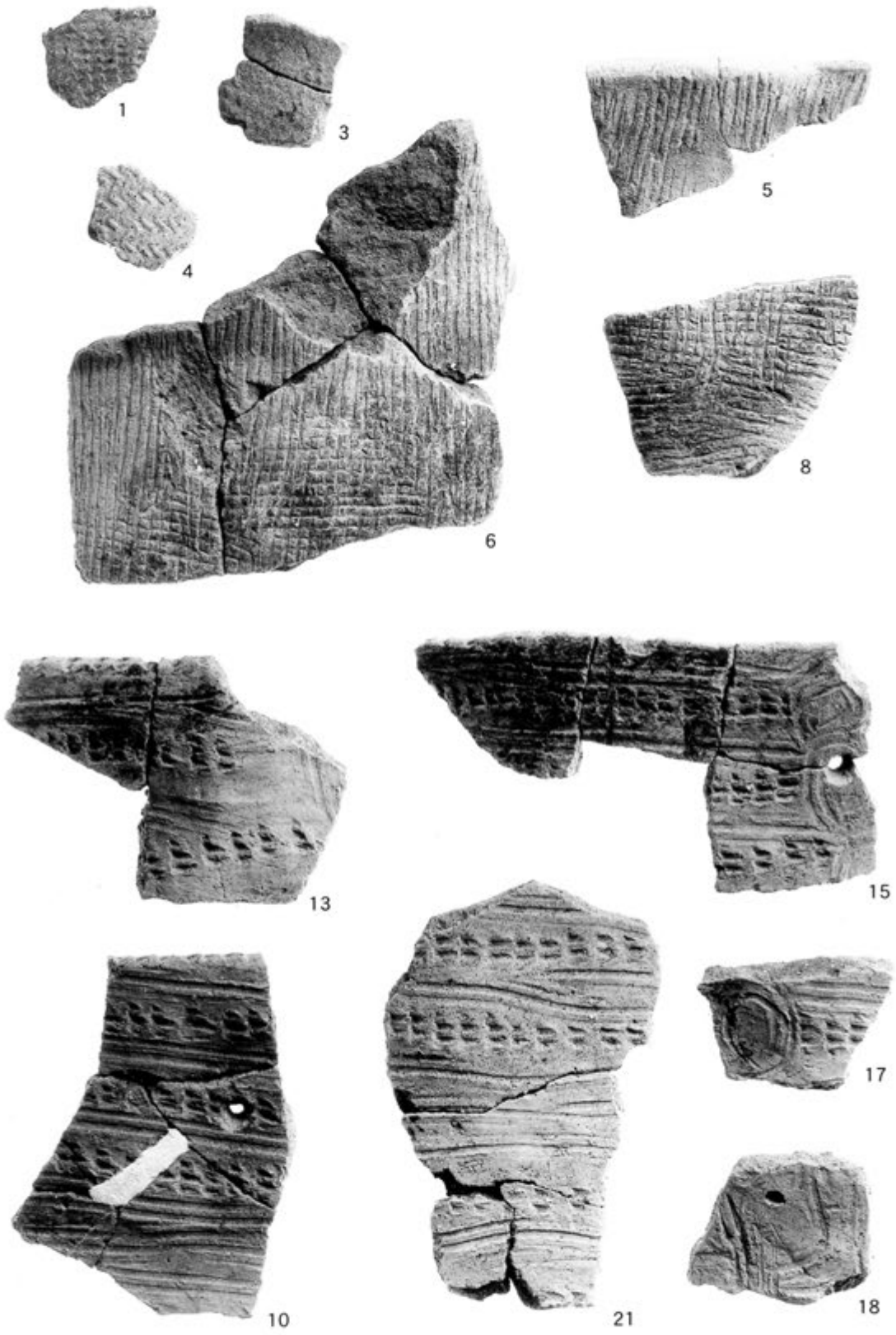
図版 5



2号陥し穴埋土状況



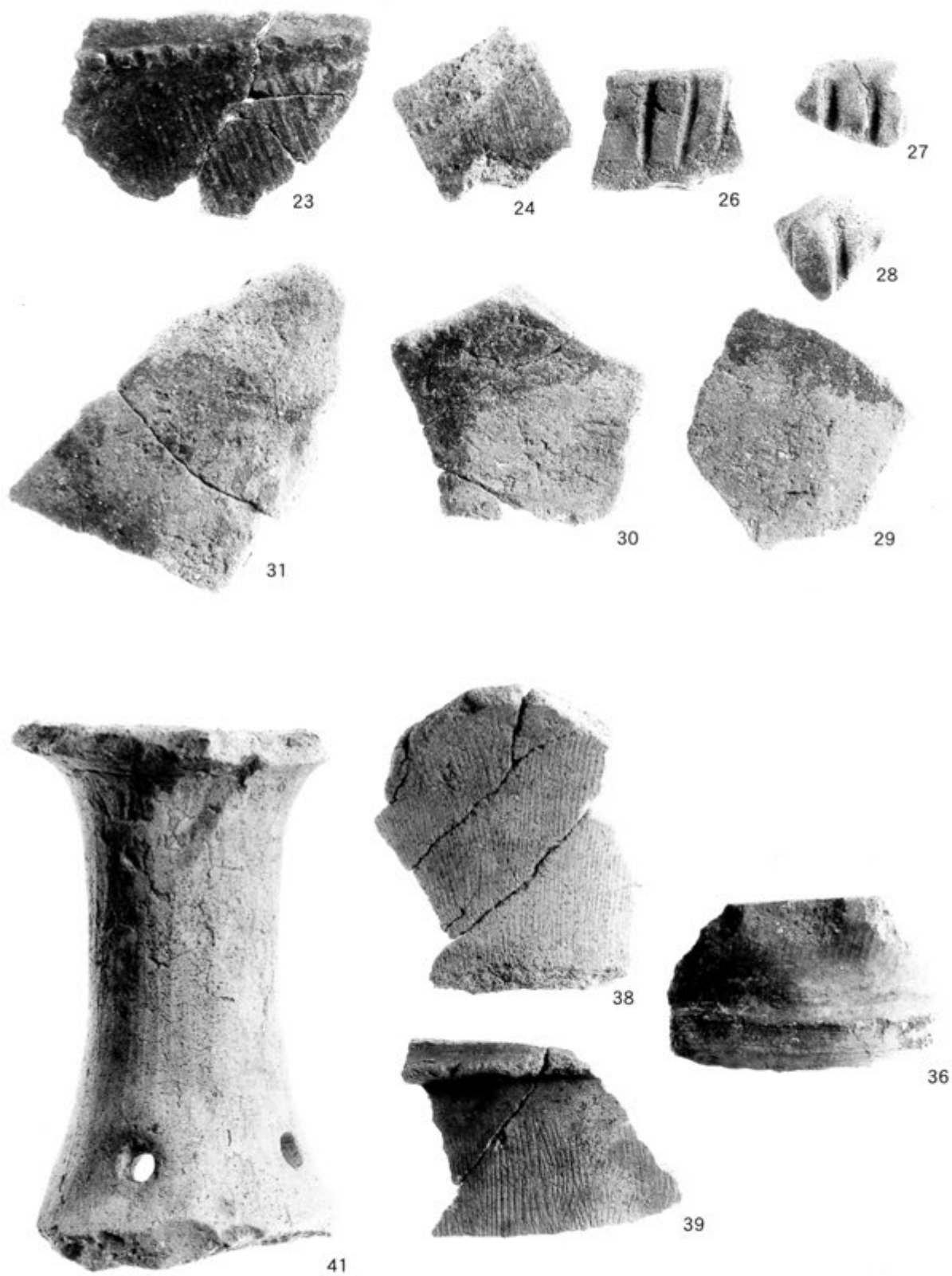
2号陥し穴半裁状況



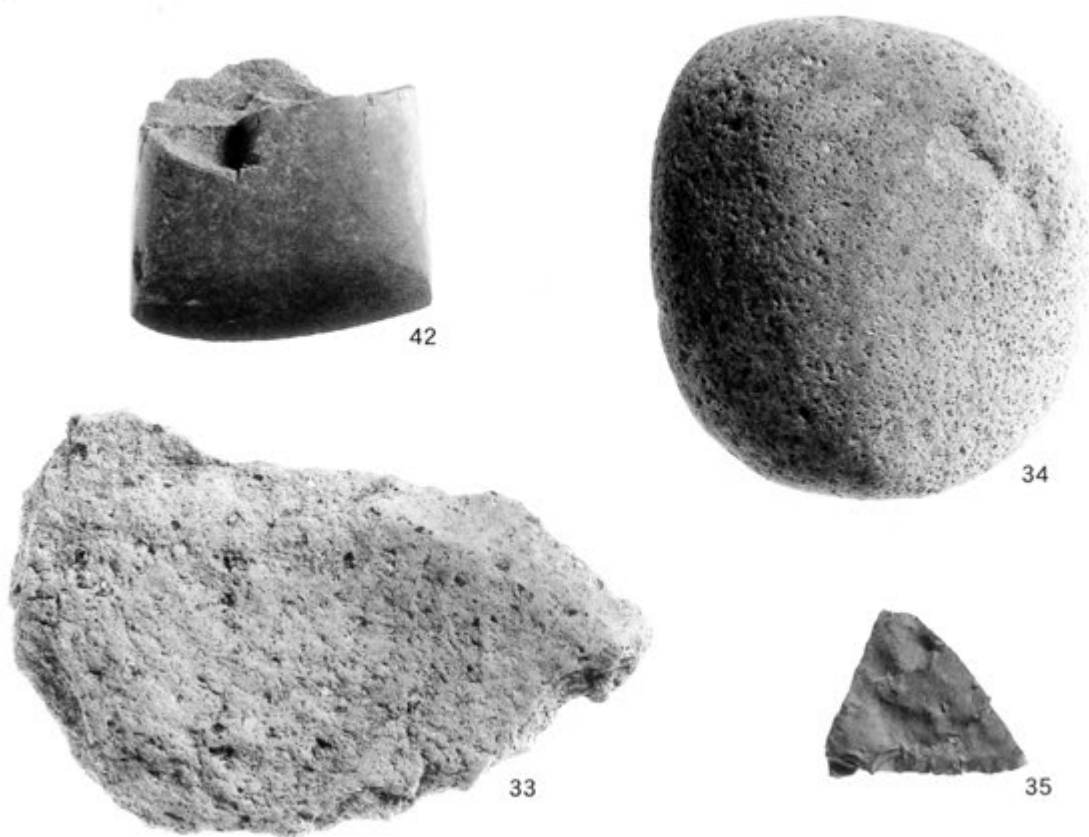
竹ノ山A遺跡出土遺物(1)



竹ノ山A遺跡出土遺物(2)



竹ノ山A遺跡出土遺物(3)



竹ノ山A遺跡出土遺物(4)



整理作業の状況

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(29)

竹ノ山A・B遺跡

平成13年3月30日

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
鹿児島県始良郡始良町平松6252
〒899-5652 ☎0995-65-8787

印刷 有限会社 あすなろ印刷
鹿児島県出水市大野原町1982
〒899-0216 ☎0996-62-2034